

古の日本(倭)の 歴史

最新版

藤田泰太郎

令和5年6月吉日公表

最新版 古の日本(倭)の歴史 はじめに

1

『古の日本(倭)の歴史』とは、縄文時代晩期に入る3,000年前頃からの気候の寒冷化により南朝鮮(南韓、現在の大韓民国)の倭人(西日本縄文人)が華北人、江南人と朝鮮人(高句麗系)の南下に圧迫され列島へと帰来する、すなわち任那が滅亡し日本(列島)と朝鮮(半島)が地政学的かつ文化的に分断されるまでの歴史と捉えられる。この帰来がスサノオ(素戔嗚尊)の出雲侵攻やその後裔者(神武・饒速日・崇神など)による度重なる東征を引き起こし、飛鳥時代に日本国が成立するまでの過程が倭の歴史で、その過程が記されたのが『古事記』と『日本書紀』(『記紀』)である。

『魏志倭人伝』には「3世紀の古の日本(倭)には、女王卑弥呼の都とする邪馬台国があり、卑弥呼が死去すると塚がつくられ、100人が殉葬された」とある。とはいえ、『記紀』には、邪馬台国や卑弥呼に関する記述が一切見られない。また、銅鐸を祭祀として用いたと思われる大国主の国も全く無視されている。奈良県桜井市には、2世紀末から3世紀初めにかけて急速に発展した纏向遺跡がある。その遺跡内に最初の巨大な前方後円墳である箸墓(＝大市墓)が威容を見せる。この箸墓の被葬者は定かでないが、『日本書紀』の「箸墓伝承」や宮内庁の治定では、箸墓の被葬者を第7代孝霊天皇皇女の倭迹迹日百襲姫命としている。近年の考古学や文献学の発展より、本著では「邪馬台国はヤマト国で、邪馬台国の中核は畿内の大和にあり、その中心は纏向遺跡で、卑弥呼は3世紀半ばに亡くなり箸墓に葬られた」と考える畿内説を採る。従って、倭迹迹日百襲姫命が卑弥呼であると推察される。この推察を起点に歴史を遡り、あるいは辿り、多くの様々な史料、文献、書物やインターネット(Net)情報並びに近年著しく発展した古代人のDNA解析を含む考古学・人類学の膨大な知見を整合性をもたせるように統合することによって、旧石器時代から飛鳥時代までの『古の日本(倭)の歴史』Ne解説論文(<https://www.yasutarofujita.com/>)を構築した。

『古の日本(倭)の歴史』は、5部構成、「第一部(旧石器時代・縄文時代)、第2部(弥生時代早期・前期・中期)、第3部(弥生時代後期・邪馬台国(虚空見つ倭国))、第4部(古墳時代前期・中期)、第5部(古墳時代後期・飛鳥時代)」となっている。このうち、弥生時代後期・邪馬台国・古墳時代前期(神武から応神東征まで)については、文献学的あるいは考古学的証拠が乏しいにもかかわらず、著者が推敲を重ねたうえの直観に基づく、多くの未解明の歴史的事象を高い蓋然性を以て説明し得る斬新な歴史観を提示している。各部は、その時代の東アジアの情勢と倭の状況を解説し、個々の事象を図表・イラスト・写真を多く取り入れて説明する。その中に赤字で囲った、あるいは赤字の著者の私見を散在させている。これらの図表・イラストやその説明の殆どは著書・文献・Net情報から引用したものである。この『古の日本(倭)の歴史』というNet解説論文で新たな知識が得られたり、あるいはインスピレーションを覚えられたら、このNet解説論文を引用して頂ければ幸いです。

2

左欄は『古の日本(倭)の歴史』初版(2019年1月公表)の序論である。初版公表以来2年、2021年1月には改訂版、さらに2023年6月には最新版を公開した。(本歴史はPowerPointファイルとして公開しており、初版は384スライドから成り立っていたが、最新版は501スライドと内容を大幅に充実させた。)初版の公表以来4年余り、古代史に造詣が深い諸姉兄から数々の高説や異論を頂き、改訂の参考にさせて頂いた。また、過去4年、自ら本歴史に関連する数十のFacebook(FB)投稿を行っており、これらの投稿は全て筆者(藤田泰太郎)のタイムラインにリストされている。これらFB投稿を通じての同好の士との活発な議論・討議を重ね、本歴史をより洗練・充実させることが出来た。

縄文時代は、1万年以上継続した持続可能な「森と水の文明」(狩猟、採取/栽培と漁撈)として世界に冠たるものである。この縄文文明を日本文化の基層となっていると捉え、かつヒトのDNA解析を駆使して明らかになった「日本人成立のモデル」を提唱した。さらに、これまで混沌としていた「紀元前1世紀より4世紀までの倭国の歴史」をイザナギ・イザナミから始まる天孫族(すなわち皇統)の系譜として捉え、具体的な年代に基づく歴史として提示することが出来た。そして、この紀元前1～4世紀の倭国の歴史を天孫族による倭国平定の歴史として再構築した。

『古の日本(倭)の歴史』の最新版も初版や改訂版と同様に、幾多の考古学的知見を忠実に反映しており、また日本国の正史と考えられる『記紀』をはじめ中国や朝鮮の正史と見なされる歴史書に記載の史実と解釈上の齟齬があるかと思うが、矛盾するところはない。かつ、ヒトのDNA解析や人類学などの自然科学的知見とも十分に整合性がとれている。しかしながら、『記紀』の神代の記述(神話とされる)は、なんらかの史実を反映したものとは思いますが、飛鳥時代の皇族や藤原氏をはじめとする有力氏族の都合のいいように改竄されていると思われる所が多々あることも事実である。

この度の最新版の公表で、『古の日本(倭)の歴史』の全貌をほぼ解明できたと考えている。しかし、『古の日本(倭)の歴史』の紀元前1～4世紀の倭国の歴史の構築に見られたように、自らのかならずしも完璧でない古代史の知見に基づいた直観と洞察により推察・構成した大胆な仮説を含み、すべてが実証されたものとはとてもいえない。将来、古代史研究者や考古学者により本歴史が順次実証されていくことを切に願っている。本最新版に対しても諸姉兄からの更なるご教授や意見を頂き、『古の日本(倭)の歴史』をさらに洗練・充実させることができれば幸甚の極みである。

2023年6月 藤田泰太郎

最新版

古の日本(倭)の 歴史

第1部(第1章)

ゲノム科学の解明した「日本人の成り立ち」

第1部(第2章)

旧石器時代

前期旧石器時代(260万年前～30万年前)

中期旧石器時代(30万年前～3万年前)

後期旧石器時代(3万年前～1万6000年前)

縄文時代

草創期(1万6000年前～1万年前)

早期(1万年前～7000年前)

前期(7000年前～5500年前)

中期(5500年前～4500年前)

後期(4500年前～3300年前)

晩期(3300年前～2800年前)

藤田泰太郎

第1部 概略

1

第1部 旧石器時代・縄文時代

1. 旧石器時代(260万年前～1.6万年前)

類人猿と区別される最初の人類が猿人であり約600万年前に誕生し、130万年前頃まで生存していた。原人(ホモ・エレクトス)は、180万年前頃に誕生し、アフリカからアジア(北京原人、ジャワ原人など)に広がり、約10万年前頃に滅びた。旧人(ネアンデルタール人やデニソワ人)の祖先は40万年前頃にアフリカで誕生したのち、20万年前頃に出アフリカを果した。ネアンデルタール人は中東からヨーロッパへと広がり、デニソワ人はシベリアから東南アジアの広範な地域に広がった。これら旧人は3万年前頃に滅びた。現生人類である新人は20万年前頃、アフリカの旧人より誕生し、7万年前頃に出アフリカを果し、イラン付近を起点にして南ルート(イランからインド、オーストラリアへ)、北ルート(イランからアルタイ山脈付近へ)、西ルート(イランから中東・カフカス山脈付近へ)の3ルートで拡散したとしている。すなわち南ルートをとった新人が東南アジアで北方と南方へ向かう集団に分かれ、前者は東アジアに広がった古モンゴロイドであり、後者がオーストラリアに入りオーストラロイドとなる。また、北ルートを取った集団がモンゴロイドとなり、西ルートの集団がコーカソイドとなった。これら3ルートの新人がイラン近傍でネアンデルタール人と交雑し、北ルートでアジアに向かった新人のうち東南アジアに向かい後にメラネシア人となった集団がデニソワ人と交雑したとみられている。尚、これら新人の集団が東アジアに到達したのは約4万年前といわれている。旧人は3万年前頃に滅びたと思われるが、新人がネアンデルタール人と共存したのは中東やヨーロッパでは数万年間、アジアでデニソワ人と共存したのは1万年程度と思われる。尤も、新人との接触だけが旧人の絶滅につながったわけではなく氷河期に入り気候の寒冷化もこの絶滅の原因のひとつと思われる。モンゴロイドはシベリアに進出し、先にシベリアに進出していたコーカソイドを圧倒し、さらにアメリカ大陸に進出した。南米に到達したのは1万年前といわれている。ヴェルム氷期(3万年前～1.5万年前、最盛期は1.8万年前)は極めて寒冷な時代にあたり、この氷期を生き延びたのは新人である。

日本列島には原人や旧人の子孫も少なからず生息していたと考えられる。列島への新人の移動であるが、7万年前に出アフリカを果した新人の中で、南ルートを取った集団の一部は東南アジアより海岸沿いに東アジアに向かい、少数が日本列島に到達していたと思われる(古華南人)。北ルートの新人がヒマラヤ山脈沿いに東アジアに到達したのは4万年前である。北ルートで東アジアに広がった新人(古華北人)の主たるY染色体系統はD型と考えられ、華北から順次列島に進出していった。

2

石器時代は、絶滅動物の存在と打製石器を使っていた時代の旧石器時代と現生動物の存在と磨製石器を使うようになった時代の新石器時代との二つに分けられる。旧石器時代は前期旧石器時代(260万年前～30万年前)、中期旧石器時代(30万年前～3万年前)と後期旧石器時代(3万年前～1.6万年前)に分かれる。日本列島には前期旧石器時代の原人・旧人の骨や遺跡は見つからず、中期旧石器時代の砂原遺跡(出雲市)が最古(約12万年前)でそれに続くのが金取遺跡(遠野市)(8-9万年前)であり、石器(ハンドアックスのような両面加工石等)や木炭粒が出土している。これらの遺跡は、旧人あるいは原人の残存者の活動の跡と見なされる。新人と思われる山下町洞人(沖縄、約3万2000年前の子供の大腿骨と脛骨)が国内最古級人骨の出土、さらに国内最古の全身骨格人骨(白保人)が出土した(約2万7000前、石垣島)。海洋民族(古華南人)の彼らは、南ルートで列島に到達し、さらに太平洋西岸、北岸を経てアメリカ沿岸に達していた可能性がある。3万年前の中期旧石器時代に入ると、新人の古華北人(Y染色体D2型(新D1a2a))が朝鮮半島経由((当時黄海は陸地化しており、必ずしも半島を経由する必要がない)でナイフ形石器を伴って断続的に日本列島に侵入してくる。その最大の集団の侵入は約2万年前であった。後期旧石器時代の遺跡は列島に広く分布し、神取遺跡(北杜市)からは台形石器と局部磨製石斧が出土した。港川人(1万7千年前の人骨、沖縄)や浜北人(1万6千年前の人骨、静岡)が出土、何れも新人の人骨化石と考えられている。後期旧石器時代には、良質の黒曜石を求めての丸木舟での交易も見られた。

2. 縄文時代(1.6万年前～2.8千年前)

大平山元 I 遺跡から1.6万年前の最古の縄文土器と思われる「無文土器」の出土をもって縄文時代の始期とする。縄文時代は1年以上継続した持続可能な「森と水の文明」(狩猟、採取/栽培と漁撈)として世界に冠たるものとする。

朝鮮半島では縄文時代草創期の1.2万年前から早期の終結時の7千年前まで遺跡が殆どなくなる。このことは、南下した古華北人が半島に留まらずに、ほぼ陸橋化した対馬海峡を通過し一気に列島にまで侵入していったためと思われる。

(1) 縄文時代草創期(1.6万年前～1.0万年前)

大平山元 I 遺跡より世界最古級の縄文土器「無紋土器」や世界最古の石鏃が出土。また、局部磨製石斧、尖頭器などを特徴とする神子柴文化が起る。1.3万年前、古バイカル人(D2(D1a2a))はクサビ型細石刃を携え、

第1部 概略

3

樺太経由で東日本に南下、東日本縄文人の基層となる。また、その頃、古華北人(D2(D1a2a))が半円錐形石核を西日本に伝え、西日本縄文人と称される。以下、草創期の出土物を列挙する。佐世保市の泉福寺洞窟から、約1.3万年前の豆粒文土器と約1.2万年前の隆線文土器。神取遺跡(山梨)から隆起線文土器。鳥浜貝塚(福井)出土の漆の枝は世界最古の約1.2万年前のものである。浦入遺跡(舞鶴市)から網漁に用いられた最古の打欠石錘。粥見井尻遺跡(松阪市)や相谷熊原遺跡(東近江市)から最古級の土偶(通称縄文のビーナス)出土。

(2) 縄文時代早期(1万年前～7千年前)

縄文文化が定着する時代で伊豆諸島を一つの起点とするかなり広範囲な黒曜石などの海洋交易や漁撈の跡が認められる。早期の出土物を列挙する。浦入遺跡(舞鶴市)から桜皮巻き弓。垣ノ島遺跡(函館市)から幼子の足形や手形をつけて焼いた足形付土版や世界最古級の漆工芸品。雷下遺跡(市川市)から日本最古の丸木舟、夏島貝塚(横須賀市、最古級の貝塚)から撚糸文系土器や貝殻条痕文系土器が出土、沖合への漁撈活動を示す。栃原岩陰遺跡(北相木村)から人骨、ニホンオオカミの骨、精巧な骨製の釣針や縫い針。横尾貝塚(大分市)から姫島産黒曜石の大型石核や剥片、石材など、流通の拠点。上野原遺跡(霧島市、最古級の大規模な定住集落跡)から、貝文土器出土(貝文文化)。

早期の終結時(7.3千年前)に鬼界カルデラ噴火があり、南九州・四国はアカホヤ火山灰に覆われ、貝文文化は消滅など、その縄文社会は壊滅した。生き延びた人々は北へと向い、そのうちのかなりの数の縄文人が当時殆ど無人であった南朝鮮(南韓)や沖縄に移住する。

(3) 縄文時代前期(7千年前～5.5千年前)

アカホヤ火山灰の打撃を受けた南九州の縄文人は生き残りをかけて西北九州さらに南朝鮮に移住したと思われる。その頃から、西北九州と南朝鮮にかけての漁撈文化が栄えた。各地で沿岸漁業や交易が盛んになった。また、当時の南朝鮮に、縄文時代草創期の列島各地の隆起線文土器に酷似した朝鮮隆線文土器が現れ、その後櫛目文土器が現れた。

遼寧省の興隆窪文化と呼ばれる遺跡のうちの一つ査海遺跡(7,000年前)の墓地から、耳に玉ケツを着けた遺体が発見された。玉七(ぎょくひ)や玉斧などの玉製品が出土した。これらの興隆窪文化由来の玉は、桑野遺跡、鳥浜貝塚、清水上遺跡、浦入遺跡など日本海側の遺跡を中心に、全国に分布している。

4

前期は気候が温暖化し始め、西日本には照葉樹林文化が東日本にはナラ林文化が流入してきた。鳥浜貝塚からは、スギ材の丸木舟、浦入遺跡からは最古級の外洋航海用丸木舟、赤色漆塗り櫛、小型弓や櫂などが出土した。さらに、朝寝鼻貝塚(岡山市)からは日本最古の稲(熱帯ジャポニカ)のプラントオパールが見つかった。三内丸山遺跡(青森市)からは、大規模集落跡、住居群、倉庫群、シンボリックな3層の掘立柱建物、板状土偶などが出土し、栗栽培、エゴマ、ヒョウタン、ゴボウ、マメなどの栽培跡が見出された。また、千居遺跡(富士宮市)からは、富士信仰のためのストーンサークル、阿久遺跡(諏訪郡原村)からもストーンサークルが見つかる。その他、里浜貝塚(東松島市)は最大規模の貝塚で、その出土品から生業カレンダーが組まれた。さらに、栗山川流域遺跡群(千葉県多古町)からはムクノキの外洋丸木舟が、真脇遺跡(石川県能登町、世界最古のイルカ漁の捕鯨基地)から、船の櫂、磬笛が出土している。

縄文時代(とくに前期と中期)には、西日本地区(照葉樹林帯)の各地と中国江南地区の各地は、それぞれ互いに交流していたと考えられる。熱帯ジャポニカは長江下流域から渡来した。

(4) 縄文時代中期(5.5千年～4.5千年前)

縄文早期の1万年前氷河期が終り世界の気候は温暖化し、7千年前の縄文前期始めから気温が上がり、前期の終了時から中期の始めに最も気温が高くなる、いわゆる縄文海侵が最高に達した。この現在より気温の高くなった時期をプシンサーマル期と呼ぶ。縄文時代後期に入ると気候が冷涼化し始め、縄文時代晩期(弥生時代草創期)になると現在より気候が低い寒冷化期を迎えた。従って、プシンサーマル期の縄文時代中期始めが縄文文化の最盛期と捉えられる。

気候が温暖化して青森市の三内丸山遺跡が最盛期を迎える。この遺跡の掘立柱建物の建築には殷尺に関連しているといわれる縄文尺が用いられていた。馬高遺跡(長岡市)や野首遺跡(十日町市)で縄文土器の円熟期を代表する火焰型や王冠型土器が出土する。また土偶も最盛期を迎え装飾性が高くなる。出土品は多岐にわたり、耳飾、石棒、ヒスイ製玉類、配石遺構などが見つかる。一の沢遺跡(笛吹市)からは太鼓に用いられた有孔鐳付土器、人面装飾付土器、埋甕、笛吹ヒスイの装身具、土偶の「いっちゃん」などが出土。また、国宝「縄文のビーナス」が長野県棚畑遺跡から、国宝「縄文の女神」が山形県西ノ前遺跡から出土。茅野市の尖石遺跡からは列石、黒曜石の交易、焼畑農耕の跡などが見られる。

第1部 概略 (つづき)

5

尚、縄文時代前期に続き岡山県の姫笹原遺跡からイネのプラントオパールが見つかっている。これらのイネのプラントオパールの形状から品種は熱帯ジャポニカと考えられ、焼畑を代表とする粗放な稲作であろう。

(5) 縄文時代後期(4.5千年～3.5千年前)

プシンサーマル期が終わり気候の冷涼化が始まる。この冷涼化によりかなりの東日本縄文人の西日本への移住が始まる。後期末(3.6千年前)には殷王朝が成立している。

三重県の丹生池ノ谷遺跡、天白遺跡や森添遺跡から辰砂による朱彩土器や朱が付いた磨石・石皿など出土。二子山石器製作遺跡(熊本)は石切り場・石器工房で、扁平打製石斧出土。智頭枕田遺跡(鳥取)から突帯文土器、大矢遺跡(天草市)からはオサンリ型結合釣針、土偶、岩偶が出土。大湯環状列石(秋田)のうちストーンサークルは万座と野中遺跡にあり、万座の方が日本で最大の日時計状組石である。忍路環状列石(小樽市)(ストーンサークル)に隣接する忍路土場遺跡の巨大木柱は、環状列石とも関連する祭祀的な道具であろう。蜷塚遺跡(浜松市)には円環状平地式の住居跡があり、首飾りや貝製腕輪を身につけた人骨、勾玉や土器、鉄鏃が出土。また、真脇遺跡(能登町)には環状木柱列(ウッドサークル)あり、巨大な彫刻柱、土偶、埋葬人骨、日本最古の仮面が出土。チカモリ遺跡(金沢市)では掘立柱の環状木柱列が発掘された。

稲(熱帯ジャポニカ)、アワ、ソバ、大豆などの栽培に基づく生活文化、さらに神道の基盤となる精神文化もまた、江南から持ち込まれたと考えられる。さらには、渴鉄鉱などからの始原的な製鉄が始まったと思われる。尚、上代日本語となる古日本語(日本基語)は、南朝鮮と西日本一帯で縄文時代後期に成立したと思われ、少なくとも、水田稲作農耕技術の到来以前に既に成立していたと思われる。

(6) 縄文時代晩期(3.3千年前～2.8千年前)

縄文時代晩期は、水田稲作の開始を始めとする弥生時代早期(3.0千年前～2.8千年前)と終期を同じくするが、始期が300年早い。晩期になると気候が一層寒冷化する。この寒冷化は世界的規模で起こり、ゲルマンやアーリア民族が南下し、圧迫された民族の逃避や文明の崩壊が見られた。中国や朝鮮でも畑作牧畜民(中原の漢民族)の南下が始まり、晩期の始めに殷が滅び周が起こり、晩期の終期には周が滅び中国は春秋時代に入った。日本では東日本縄文人(原アイヌ人、蝦夷)の西日本への移住が起った。この移住により東日本と西日本の縄文人の一体化が進んだ。中国での漢民族の南下は江南人を圧迫し周辺地域に逃避させ、一部は朝鮮半島南部や西北九州や西部日本海沿岸に達した。この避難民が南朝鮮や日本に水田稲作をもたらした。

晩期に入ると気候の寒冷化により東日本縄文人が西日本に移住したため東日本縄文文化は衰退に向かった。しかし、この衰退にもかかわらず繁栄を続けていたのが、東北北部から北海道西南部を中心とする、原アイヌを主体とする縄文文化の極めて高度に成熟した亀ヶ岡文化が出現した。晩期の主な遺跡・出土品は次の通りである。

葉畑遺跡(唐津市)から水田用の温帯ジャポニカ種の直播きの最古の水稲耕作跡、山の寺式土器出土。板付遺跡(福岡市)からは最初期の環濠集落と水稲耕作跡と夜臼式土器出土。南溝手遺跡(総社市)からはイネのプラントオパール、最古級の粃痕のある土器、石鍬や石包丁が出土。原山支石墓群(島原市、原山ドルメン)は、国内の支石墓遺跡としては最古最大級のものである。大石遺跡(豊後大野市)から大規模な建物址、黒色磨研土器、打製石斧(耕具)や横刃型石器(収穫具)出土。伊川津貝塚(いかわづ)(田原市)からは、スガイ・アサリなどの主鹹貝塚、抗争の痕跡を遺す人骨、抜歯した人骨、甕棺、土偶、耳飾、石刀、石棒、石冠、勾玉、骨角器など出土。亀ヶ岡文化の亀ヶ岡遺跡(つがる市、集落遺跡)で著名な遮光器土偶が出土。山王困遺跡(さんのうがこい)(栗原市)からは、土製耳飾りやペンダント、編布(本州初の発見)、籃胎漆器・櫛・腕輪・耳飾り・紐状製品、ヌマガイの貝殻に漆を塗った貝器が出土。

近年の人類学や考古学に必要なヒトDNA解析

ヒトのDNA解析には、父系で遺伝するY染色体ハプログループ解析と母系で遺伝するミトコンドリアDNA解析および父・母系によらない核(ゲノム)DNA解析がある。DNA解析では、核、Y染色体、ミトコンドリアにある特定のSNP(1塩基変異)、反復配列や小規模の欠失を解析する。2003年にヒトゲノムの全塩基配列が決定されて以来、考古学や人類学の分野にも、縄文人・弥生人等の古代人や原人・旧人の太古人の遺伝形質の解明に、ミトコンドリアDNA解析やY染色体ハプロタイプ解析に加えて、核DNA解析が使われるようになった。しかし、現在人の核ゲノム解析は、細胞から無傷のゲノムDNAを取得することができるが、古代人や太古人の核DNAは大幅に損傷しており、5千年前のアイスマンのように古代から凍結されていたか、あるいは特殊な条件で保存されてきた人骨組織を除き、出土人骨(主として臼歯内組織、最近では頭骨(耳の奥))から核DNAを抽出するしか手段がなく核DNA解析ができる質と量のDNA標品を得ることは極めて困難である。とはいえ、2010年に特殊な条件で保存されたネアンデルタール人の骨組織から核DNAが抽出され、全ゲノム配列がほぼ決定された。また日本でも、縄文人や弥生人の核DNA解析が10例ほど報告されている。

核DNAは細胞当たり2コピーが普通であるがミトコンドリアは数百コピーあり、サイズも核DNAの数千分の1である。従って、古代人や大古人の出土人骨からミトコンドリアDNAを極少量でも抽出できれば解析が可能となる。また、Y染色体ハプロタイプ解析もY染色体の一定領域を解析するだけであるので、核DNA解析に比べる少量のDNA標品で解析が可能である。従って、現在でも古代人や太古人のDNA解析ではミトコンドリアDNA解析の成績数が他のDNA解析を凌駕している。

(藤田泰太郎、柏亭セミナー「日本人の成り立ち」
YouTube21/1/21抜粋)

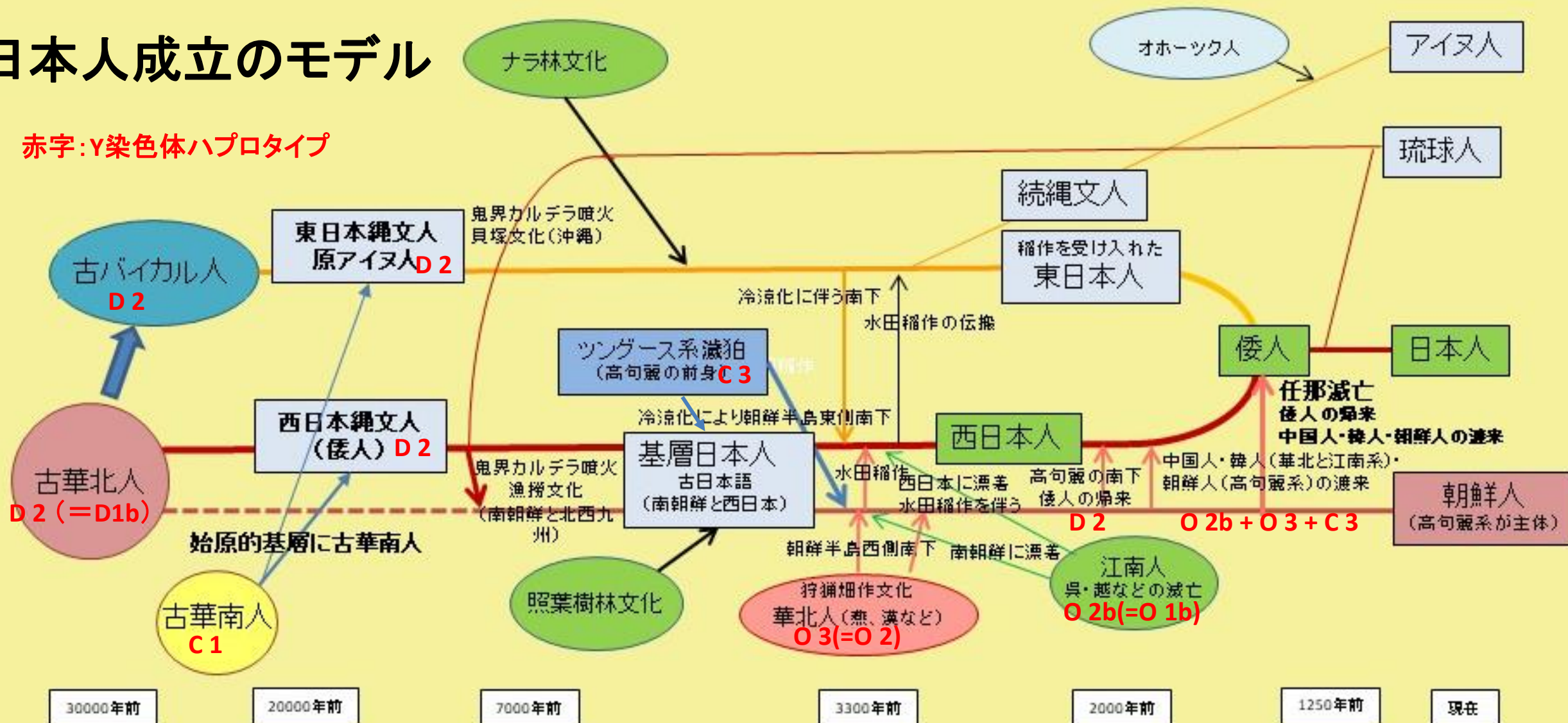
古の日本(倭)の歴史

第1部(第1章)

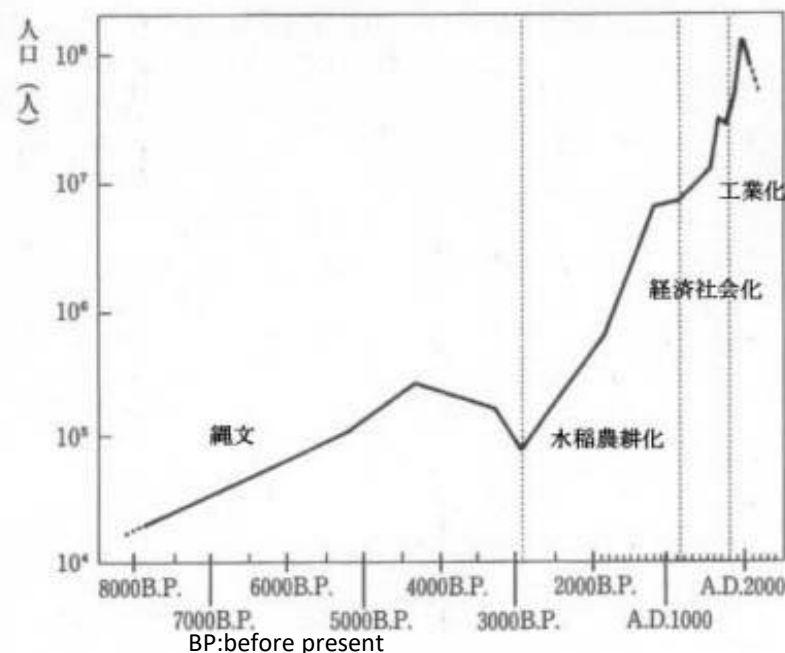
ゲノム科学が解明した「日本人の成り立ち」

日本人成立のモデル

赤字: Y染色体ハプロタイプ



日本人口の趨勢：縄文早期～2100年



鬼頭宏 (歴史人口学者)

日本人成立のモデル

1

日本列島には前期旧石器時代の原人・旧人の骨や遺跡は見つからず、中期旧石器時代の砂原遺跡(出雲市)が最古(約12万年前)でそれに続くのが金取遺跡(遠野市)(8-9万年前)であり、石器(ハンドアックスのような両面加工石等)や木炭粒が出土している。これらの遺跡は年代的に新人(ホモサピエンス)の活動の跡とは思えず、旧人(デニソフ人か)あるいは原人の残存者の痕跡と見なされる。列島において新人の活動が本格化するようになるのは、3万年前に始まる後期旧石器時代になってからである。日本では旧石器時代に続く新石器時代を縄文時代と呼ぶが、縄文時代は世界最古級土器(縄文土器)が作られた1.6万年前を契機とし草創期に入る。この縄文文化は、1万年以上継続した持続可能な「森と水の文明」(狩猟、採取／栽培と漁撈)として世界に冠たる文明である。

新人(ホモサピエンス)の日本列島への到達は、まず出アフリカ(7万年前)から南ルートを取った集団の一部が東南アジアより海岸沿いに東アジアに向かい、3.5万年前頃には列島に到達していた(古華南人、Y染色体ハプログループC1a1型か)。また、4万年前頃に北ルートで中央アジアに到達したY染色体D系列は、D1a1型(チベットに多い)とD1a2a型(日本特有)に分岐した。後者の集団は華北に移動し、さらに朝鮮半島経由でナイフ形石器を伴って断続的に列島に侵入してくる。その最大の集団の侵入は約2万年前で東北地方にまで達した。1.3万年前、古バイカル人(バイカル湖に達した古華北人)(D1a2a)は、クサビ型細石刃を携え、樺太経由で東日本に南下、東日本縄文人の基盤となる。その頃、古華北人が半円錐形石核を西日本に伝え、西日本縄文人と称される。従って、縄文人(西日本縄文人と東日本縄文人)は、古華南人を基層に古華北人と古バイカル人が重層し、3者が混雑して成立したと考えられる。

朝鮮半島では縄文時代草創期の1.2万年前から早期の終結時の7千年前まで遺跡が殆どなくなり、新人の気配が絶える。このことは、南下した古華北人が半島に留まらずに、ほぼ陸橋化した対馬海峡を通過し一気に列島にまで侵入していったためと思われる。縄文時代早期と前期の境(7,000年前)に鬼界カルデラ噴火があり、南九州と四国の西日本縄文人は壊滅した。その災厄から逃れた西日本縄文人の一部は北へ向い、当時殆ど無人であった南朝鮮(南韓)に渡り、漁撈文化を興した。このように、朝鮮半島の新石器時代の原住民は西日本縄文人と考えられる。

縄文時代前期・中期には汎地球的に気候が温暖化して、三内丸山遺跡に代表されるような高度な縄文文化が花開いた。当時の本州、九州、四国、南朝鮮は江南と同じく、照葉樹林帯にあり江南の農耕文化の影響を強く受けた。雑穀類や豆類の栽培が始まり、西日本では熱帯ジャポニカの畑作も始まった。また、後世の神道に通じる精神文化もこのころに醸成された。しかし、縄文時代後期からの汎地球的な気候の冷涼化により世界的な狩猟・畑作民の南下が始まった。日本列島でも冷涼化により東日本の食糧事情が悪化し、東日本縄文人の南下が始まり、東西の縄文人の均一化が進んだ。この頃、均一化した高度な縄文文化を基盤とし、日本語の原型、古日本語(日本基語)が西日本と南朝鮮(核は北西九州か)で形成された。

Y染色体型O系列は、1万年前に華南でO1a、O1bとO2型へ分岐した。O系列(とくにO2)の拡散力は凄まじい。縄文時代晩期に気候が寒冷化しはじめると、北方にいたO2型は華北に移動し始めた。O2型はさらに人口を増やし古モンゴルや古華北人のC系列(C2)やD系型(D1a2a)を圧倒した。さらに春秋・戦国時代になると華南のO1aとO1b型を圧倒した。O1a型は台湾やフィリピンなどの島嶼部へ、O1b型はO1b1とO1b2型に分かれ、O1b1型は東南アジアへ、O1b2型は東に向かい南朝鮮や西日本へ逃れた。従って、弥生時代、呉や越などの滅亡により列島に渡来した江南人はO1b2型で、直接あるいは半島経由で列島に渡来した。その時期は弥生時代前期・中期と思われる。弥生時代の江南人の南朝鮮および西日本への流入は、南朝鮮ではO1b2型が優勢になったが、列島では倭人の古日本語やY染色体型(D1a2a)に大きな変動をもたらすほどの規模ではなかった。

2

地球気候のさらなる寒冷化により朝鮮人(高句麗系Y染色体型C2)が半島東岸を南下、さらに華北人(O2、燕・漢など)が半島西側を南下した。弥生時代中期後葉の紀元前後になると、これらの民族移動と前漢の滅亡による楽浪郡の混乱により南朝鮮の西日本縄文人(倭人、D1a2a)が圧迫され初め、その一団が列島に帰来した。即ち、倭人の伊邪那岐・伊邪那美や素戔嗚の帰来、さらに瓊瓊杵や彦火明の筑前や丹後への降臨である。(実際、瓊瓊杵や饒速日(素戔嗚の末?)の子孫のY染色体型はD1a2aであったという。)伊邪那岐から瓊瓊杵までの系譜、即ち伽耶での天孫族の降臨までの系譜は、新羅王室の初期系譜に酷似している。これは、紀元前後の伽耶(後の新羅を含む)は倭人(西日本縄文人)により政治的に支配されており、初期新羅王室の系譜は伽耶倭人王室の系譜であったことに起因すると考える。さらに、2世紀の後漢の弱体化と地球規模の気候の寒冷化による朝鮮人(高句麗系C2)の南朝鮮へのさらなる南下が、第8代新羅王阿達羅の王子の天日鉾の帰来を引き起こし倭国大乱の引き金となった。また、南朝鮮に伽耶の後継国の任那が成立し、邪馬台国時代には中国王朝や三韓との外交を担った任那・伊都国連合を形成した。

4世紀末に応神王朝が成立する頃から任那を核とする南朝鮮への倭国の軍事進出が顕著となり、それに伴って南朝鮮からの渡来人の来倭が目立ってきた。応神朝には、葛城襲津彦や倭軍の精鋭の助けにより新羅の妨害を排し、かつて秦韓に居住していた弓月君(秦氏の先祖)の民(1万人以上)(Y染色体O2型が大半と思われる)が渡来してきた。その頃、海部(あまべ)や山部などの土木技術者、大陸の学芸・技術をもった漢人(あやびと)など(O2型)も渡来した。その後も倭国と任那との経済的・政治的繋がりが続き三韓の百濟人、新羅人、高句麗人(O1b2、O2、C2の混成)が断続的に渡来した。7世紀に入ると任那が新羅に滅ぼされ、さらに百濟が新羅・唐の連合軍により滅亡した。その後、白村江の戦いで倭国の南朝鮮での失地回復を試みたが、新羅と唐の連合軍により大敗した。さらに、高句麗が新羅・唐により滅ぼされるに至った。この朝鮮半島の動乱により、南朝鮮の倭人(D1a2a)の多くが帰来し、また百濟や高句麗の遺民が大挙倭国に渡来した(O1b2、O2、C2)。ここに、縄文前期始期の7千年前から綿々と続いた緊密な倭国と南朝鮮の政治的・経済的交流が地政学的に分断された。それ以来、日本と朝鮮との交流や交易が大幅に縮小され、日本語と韓国語(南朝鮮の言語)も乖離し始め、お互いに独自の発展と国造りが進められた。しかしながら、その後も歴史時代の長年の断続的な中国・朝鮮からの渡来人の来日や豊臣秀吉の朝鮮出兵での多数の捕虜の連行等があり、現在の日本人のY染色体組成は(C系列(C1a1+C2):D系列、D1a2a:O系列(O1b2:O2))=8.5:40.8:(27.0:22.1)(比率%)と成っている。

注目すべきことは、日本人のY染色体組成のO系列(O1b2とO2)の比率が49.1%に達することである。縄文時代前・中期の江南からの渡来者のY染色体系列はO型(O1b2)ではなく、日本人に少ないが有意なC1a1ではなかったかと類推する。何故なら、江南にO1b2系列が広がるのは地球の気候の寒冷化する縄文時代後期からと思われるからである。かくて、弥生時代になってからのO2型の拡大に圧迫された江南人(O1b2)が、倭国に小規模ながら断続的に渡来し始めた。一方、O系列O2が日本(倭国)に渡来し始めたのは3世紀半ばの古墳時代からと思われ、古墳時代以降にO2型がO1b2型と共に日本に渡来したと推察する。かくて、古墳時代以降の渡来人の数は弥生時代の渡来人よりずっと多数と推測される。それ故に、O型(O2とO1b2)が現在の日本人のY染色体組成の比率でほぼ半数を占めるに至ったと考察する。

日本人成立のモデル

3

アイヌ人

縄文時代草創期1.3万年前、古バイカル人(Y染色体型D1a2a)がクサビ形細石刃石器を携え、バイカル湖畔より、樺太経由で南下、北海道・東日本に侵入し、東日本縄文人(原アイヌ人)になる。古華北人は数万年前から断続的に列島に侵入していたが、1.3万年前、西日本に半円錐形細石刃石器を持ち込み、西日本縄文人となる。

縄文文化の主たる担い手は、東日本縄文人であった。気候の冷涼化が始まる縄文後期・晩期に東日本縄文人が南下し、西日本縄文人と混ざる。さらに、古墳時代、飛鳥・奈良時代の後の平安・鎌倉時代に、北方の諸民族が混雑したオホーツク人が北海道に侵入、日本人(東日本縄文人(原アイヌ人))と混ざりアイヌ民族とよばれるようになる。ちなみに、この時代に東日本縄文人(原アイヌ人)にはなかったミトコンドリアのハプログループYがオホーツク人によってもたらされた。従って、現在のアイヌ人が北海道の原住民だとはいえない。

琉球人

3~4万年前に、古華南人(Y染色体型C1a1?)が南シナ海の海岸線を北上し、台湾から沖縄に至ったと思われる。しかし、この沖縄の古華南人は旧石器時代後期には衰退したと思われ、新石器時代の始まる7,000年前頃まで沖縄には新人の活動の痕跡が殆ど無くなる。しかしながら、縄文時代早期と前期の境に起こった鬼界カルデラ噴火(7,000年前)の避難民(西日本縄文人、Y染色体型D1a2a)が、沖縄に渡って琉球人の先祖となった。かくて、沖縄はちょうど7,000年前頃に新石器時代の始期である貝塚時代に入った。さらに南九州の倭人(D1a2a)が弥生時代以降に沖縄に移住することにより、現在の琉球人が成立した。

日本人のY染色体ハプログループと核ゲノム解析

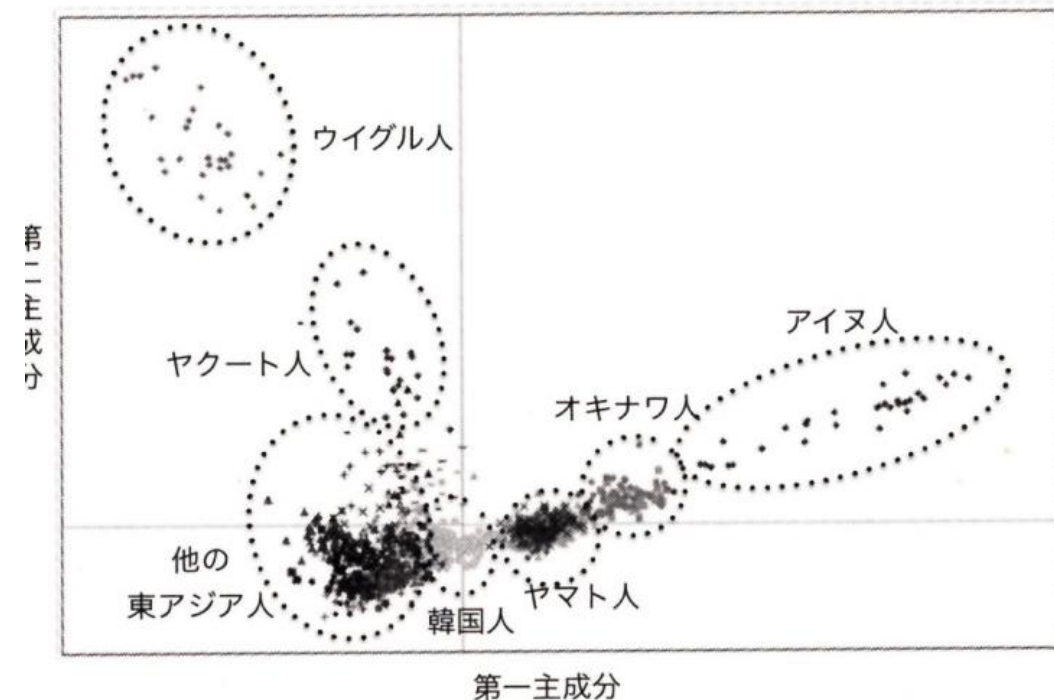
日本人(アイヌ人と琉球人を含む)成立に至る民族移動をY染色体ハプログループの移動と捉え上述した。日本人形成に至る民族移動の結果、日本人のY染色体ハプロタイプは、(C系列(C1a1+C2):D系列、D1a2a:O系列(O1b2:O2))=8.5:40.8:(27.0:22.1)(比率%)となった。また、D系列ハプログループD1a2a型の分布は、(アイヌ:関東:西日本:沖縄=87.5:48.2:26.8:55.6(%))となる。O系列(O1b2とO2)の比率は、日本人は49%であるが、西日本では61%に達する。また、朝鮮半島からのO系列(O1b2とO2)の移動ルートと思われる、北九州-瀬戸内海沿岸-近畿地方-東海地方から関東地方の太平洋岸において、O系列の頻度が顕著に高い。

新石器時代(縄文時代)の南朝鮮の原住民は、西日本縄文人であった。彼らのY染色体ハプロタイプはD型(D1a2a)であったが、江南人(O1b2)、華北人(燕や漢など、O2)や朝鮮人(高句麗系)(C2)の南下・侵攻により、南朝鮮の西日本縄文人のY染色体ハプロタイプD1a2a型が徐々にO2やC2型に移行したと思われる。さらに、紀元前後および任那滅亡時にはかなりの倭人(西日本縄文人、D1a2a)が倭国に帰来したと思われる。この民族移動のため、現在の韓国(南朝鮮)人のY染色体ハプロタイプD1a2a型の比率は、数%とかなり低いが、殆どD1a2a型が見られない中国人などの他の東アジア人に比較すると有意に高い。

核ゲノム解析は全ての染色体を解析の対象とするため、極めて多数の遺伝子配列情報を比較解析することができる。右図は東アジアにおける人類集団の遺伝的関係を示す。右上図(核DNA解析でたどる日本人の源流、斎藤成也)で上側にずれているウイグル人、ヤクート人と同様なアイヌ人の上側へのずれは、アイヌ人への北方系民族の遺伝的形質の流入を推察させる。一方下方に直線状に位置しているのが、アイヌ人、オキナワ人、ヤマト人と韓国人であり、アイヌ人がもっとも上方で、オキナワ人、ヤマト人、韓国人が続く。このずれは正しく縄文人の影響、すなわちアイヌ人がもっとも濃密に縄文人のDNAを受け継いでおり、それにオキナワ人、ヤマト人がつづき韓国人も弱いながら縄文人のDNAを含んでいると推察される。さらに、右下図は、篠田らにより解析された、福岡や長崎の弥生人を含む人類集団の遺伝的関係を示すが、注目すべきなのは、韓国人は、縄文人と大陸人の混血と思えることである。斎藤氏と篠田氏の2研究グループが公表した東アジアの人類集団の遺伝的関係は、「韓国人は南朝鮮の倭人(西日本縄文人(原住民))と大陸人との混血である」という本稿の推察を裏付けるものである。また、「韓国人のY染色体ハプロタイプD1a2a型の比率は数%とかなり低いが、中国人などの他の東アジア人に比較すると有意に高い。」との結果とも合致する。

(参照「日本人の成り立ち」YouTubeアドレス、<https://youtu.be/2Ae8c5XKfLE>)

核ゲノムの主成分解析



縄文時代と弥生時代——縄文人、弥生人そして倭人

日本では旧石器時代に続く新石器時代を縄文時代と呼ぶが、これは1.6万年前に世界最古級土器(縄文土器)が出土したためである。この土器の発明を契機とする縄文時代は、1万年以上継続した持続可能な森と水の文明(狩猟、採取/栽培と漁撈)として、世界最古の漆工芸品、世界最古級の石鏃、打欠石錘、捕鯨、最古級の定住集落、玉造工房、丸木舟、沖合漁業、高度な造形美を備えた火焰土器や水煙土器、優美な女神の土偶等を生み出した、世界に冠たる文明と考える。

新人(ホモサピエンス)の日本列島への到達は、まず出アフリカ(7万年前)から南ルートを取った集団の一部は東南アジアより海岸沿いに東アジアに向かい、少数が列島に到達していたと思われる(古華南人)。この古華南人の基盤の上に、4万年前頃に北ルートで東アジアに到達した古華北人(Y染色体D1a2a)が朝鮮半島経由でナイフ形石器を伴って断続的に列島に侵入してくる。その最大の集団の侵入は約2万年前であった。1.3万年前、古バイカル人(バイカル湖に達した古華北人、原アイヌ人)(D1a2a)は、クサビ型細石刃を携え、樺太経由で東日本に南下、東日本縄文人(原アイヌ人、蝦夷)の基層となる。その頃、古華北人が半円錐形石核を西日本に伝え、西日本縄文人と称される。従って、古華南人を基層に、古華北人と古バイカル人が入り、3者が混在して縄文人(西日本縄文人と東日本縄文人)が成立したと考えられる。

朝鮮半島では縄文時代草創期の1.2万年前から早期の終結時の7千年前まで遺跡が殆どなくなる。このことは、南下した古華北人が半島に留まらずに、ほぼ陸橋化した対馬海峡を通過し一気に列島にまで侵入していったためと思われる。縄文時代早期と前期の境目(7,300年前頃)に鬼界カルデラ噴火があり、南九州と四国の西日本縄文人は壊滅した。その災厄から逃れた西日本縄文人は北へ向い一部は当時殆ど無人であった南朝鮮(南韓)に渡り、漁撈文化を興した。このように、朝鮮半島の新石器時代の原住民は西日本縄文人と考えられる。

縄文時代前期・中期には気候が温暖化して、三内丸山遺跡に代表されるような高度な縄文文化が開花した。当時の本州、九州、四国、南朝鮮は江南と同じく、照葉樹林帯にあり、江南の農耕文化の影響を強く受けた。穀類(水稻、きび、あわは、後期以降に栽培)、豆類やイモ類の栽培が始まり、西日本では熱帯ジャポニカ(赤味を帯びた粳、赤飯)の畑作も始まった。また、湯鉄鉱からの始原的な製鉄も始まったとされる。さらに、後世の神道に通じる精神文化もこのころに醸成された。このような縄文文化の高度化に伴い、西日本と南朝鮮で日本語の原型、古日本語(日本基語)が形成された。古日本語は、かなり早い時代に完成していたと考える。少なくとも、完成し尽くされた言語といわれる、サンスクリット語の成立時期、3000年前には、水田稲作農耕技術の到来以前に、日本基語は混合言語として既に成立していたと考える。なぜなら、1万年以上に及ぶ縄文文化が終結し、新しい水田稲作技術や青銅器などをもたらした江南からと思われる渡来弥生人の故郷が、上代日本語から全く推測できないという、異常としか言いようのない現象は、古日本語がよほど完成され、語彙も当時としてはそれほど借用しなくても済むほどに十分であったから、渡来人の言語を水稻技術関連語として以外に必要としなかった、という理由しか説明が付かない。

長い縄文時代を通じて江南文化との交流は小規模であるが持続的に続いており、なにもこの交流は弥生時代に始まったものではない。しかし、気候の冷涼化による華北人の南下が江南からの渡来弥生人の南朝鮮や列島へ避難を促したのも事実である。しかしながら、弥生時代の江南人の流入は、縄文人を基盤とする倭人の古日本語やY染色体型(D1a2)に大きな変動をもたらすほどの規模ではなかったのも明らかである。さらに、縄文時代の長年の江南との文化交流により、熱帯ジャポニカの陸稲や雑穀・豆など栽培技術や神道に通じる精神文化の基盤が確立しており、渡来弥生人によってもたらされた水稻技術や青銅器などの金属文化が縄文人の生活・文化に根本的な変革をもたらしたとは考えていない。ちなみに、弥生時代早期に江南から持ち込まれた水稻用温帯ジャポニカは、南朝鮮や列島では江南より気候が冷涼なため今ひとつ栽培に適さず、従来の熱帯ジャポニカと自然に混雑して耐寒性品種(早生種)ができ、一気に南朝鮮および列島全域に水田稲作が広がったと思われる。世界に冠たる縄文文化に続いて、単に弥生土器の出土に因む弥生文化が興ったのではなく、縄文文化が継続的に発展して、紀元前数世紀に本格的な青銅器・鉄器時代に入り、さらに古墳時代に移っていったと考える方が、筆者の感性に響く。

尚、倭族(あるいは倭人)は、中国で用いられ東夷等、ひろく東方の異民族をさす総称して用いられることがある。しかし、倭人は日本人(日本列島の住民)の古称として汎用されてきた(『漢書』など)。弥生人という弥生時代に列島に住んでいた倭人をさすが、弥生人は渡来弥生人を指すと混同されていることが多い。筆者は、倭人はあくまで縄文人を基盤としており、弥生時代に列島に住んでいた倭人を弥生人と呼ぶのは適切でないとする。弥生時代の列島の住民は渡来弥生人と倭人(縄文系)であり、渡来弥生人は、縄文系の倭人と交雑して数世代で倭人となる。

Facebook 藤田泰太郎タイムライン投稿20/1/31

わ(倭)、やまと(邪馬台)、そして日本(≡任那)

縄文・弥生時代の列島および朝鮮南部の住民は、古代中国人に問われ、自分たちのことをなんと呼んでいたのだろうか。我・吾(わ)と自称したので、それが漢字の倭になったのではないか。後漢に成立した『説文解字』に「倭は順(しなやか)なる貌(すがた)なり。人に従い委(あづか)る声」とある。転じて背が丸く曲がって低い人を指すといわれる。このように倭は必ずしも蔑称とはいえない。倭人は縄文人のように和を尊んでいて、戦いを好まない「和」を重んじる人柄であり、倭の「背が丸く曲がって低い人」とのイメージを嫌って、倭を和としたのではないか。

『日本書紀』に、2世紀末に饒速日(ニギハヤヒ)が建てたヤマト国、「虚空見つ日本(倭)の国(「虚空見つ」は修辞句)」が記載されている。ニギハヤヒは南朝鮮出自のはユダヤ系の倭人と思われ、ヤマトはヘブライ語に由来するともいわれている。この「ヤマト」に漢字が当てはめられ「邪馬台」とされた。ヤマトは、倭、大倭、大和、日本の和訓となった。このなかで日本だけが異質である。

3世紀末に九州の任那から東遷した勢力(崇神を旗頭)は、大和の地に入ってから、自らを「任那」と号したのではないか。「日本」の国号が初めてあらわれるのが10世紀成立の『旧唐書』、11世紀成立の『新唐書』にみられる「倭国伝」からである。したがって、倭王権が倭から日本に国号を変えたのは、唐代に入ってからと考えられる。朝鮮の古地名は、「本」は「那」で国邑を表す。また「日」は(nit)であり、「任」(nin)に音韻上重なるものである。ヤマト王権は任那滅亡にともなう新しい時代に対応して、国家的自立と自負を表明するため、「任那」の栄光の記憶を復活し、しかも天皇「日の御子」の治める国にふさわしく「日本」という国号を立てたのではあるまいか。このように考えると『旧唐書』にある「日本はもと小国であったが、倭国の地を併合した」という記述がよく理解できる。(古代日本異族伝説の謎、田中勝也) 尚、『記紀』に「日の御子」とは天皇・大王を指すと記載されている。

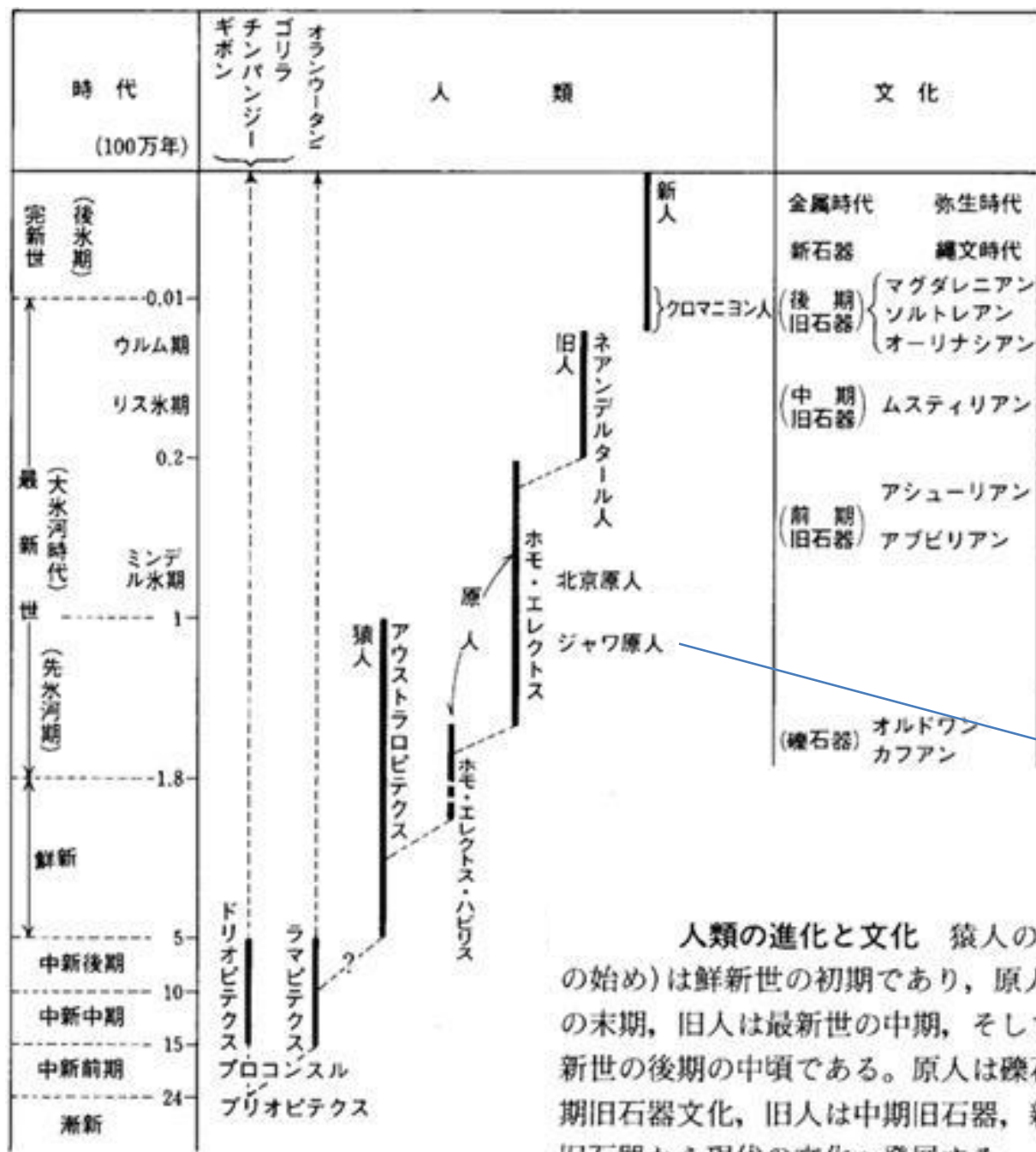
国名、民族名は他国民から問われた時の自称であることが多い。倭(わ)もこの範疇に入ると思う。アイヌ人は、アイヌ語でのヒト(アイヌ)を自称した故にアイヌと呼ばれた。「モンゴルでは、他民族と区別する自らをHunと呼んだ、漢もHanと自称した。」(FB情報)。奴国は海神族の国で、海神族を「ナ」と自称したのではないか。『魏志倭人伝』には2つの奴国が記述されている。一つは筑前の奴国で、もう一つは邪馬台国や狗奴国に至る直前の奴国である。筑前の奴国の嫡流の和邇氏が近江湖西に遷り、新たな奴国を建てたことを示唆する。

(FBコメント、藤田)

猿人・原人・旧人・新人 そのアフリカからの拡散

人類の拡散

出アフリカ



人類の進化と文化 猿人の出現(人類の始め)は鮮新世の初期であり、原人は鮮新世の末期、旧人は最新世の中期、そして新人は最新世の後期の中期である。原人は礫石器から前期旧石器文化、旧人は中期旧石器、新人は後期旧石器から現代の文化へ発展する。

(啓林館 第2節 顕生代、Net)

ホモ・フロレシエンスの復元模型

写真提供:国立科学博物館

ホモ・フロレシエンスと現代人の比較

ホモ・フロレシエンス 現代人

インドネシアで生き続けてきた原人の子孫
4万年前にネアンデルタール人が絶滅してから、地球上に存在するヒトは現生人類であるホモ・サピエンスだけとされてきた。しかし、2003年、新種の人類の化石がインドネシアのフローレス島で発見された。彼らは1万8000年前まで生きていたといわれている。彼らは発見地の名前からホモ・フロレシエンスと名付けられた。上図のように原人以降の年代に生息していた人類としてありえないほど小型でした。彼らの頭の骨格が180万年前に生息していたジャワ原人に似ていることから、フローレス島に漂着したジャワ原人が100万年以上にわたって狭い孤島で独自の進化をとげた結果、身体も脳も小型化していったと考えるのが妥当だと述べています。
(ホモ・サピエンスの誕生と拡散、篠田謙一)

アジアで第5の原人 6万年前、比ルソン島に(ルソン原人)
日本経済新聞2019/4/11
フィリピン・ルソン島の洞窟で見つかった歯などの化石が新種の原人と分かったとフランス国立自然史博物館などのチームが10日付の英科学誌ネイチャーに発表した。現生人類のホモ・サピエンス(新人)が到達する前にいたと考えられ、アジアでは北京原人などに続き5種類目となる。

フィリピン・ルソン島の洞窟で発掘された新種の原人の歯の化石(研究チーム提供)=共同化石は5万年前から6万7千年前のものと推定。
アジアではこれまでに北京原人のほか、ジャワ原人、インドネシアのフローレス原人、台湾沖で化石が見つかった「澎湖人」が知られている。

原人

日本に原人がいた？

昭和59年以降調査された宮城県馬場壇A遺跡から14万年前と推定される地表面が検出され、100点を超える石器群と共に炉跡らしい遺構が検出された。宮城県では以前に座散乱木(ざざらぎ)遺跡からも約4万4千年前の石器が発見されており、原人・旧人段階の古さをもつ人類遺跡の証拠が多数上がっていた。しかし、その年代決定については批判もあったため、様々な理化学的年代測定法を採用し、先の14万年という数値が出てきた。

いっぽう、出土した石器の「使用痕」を観察してみると動物の皮、骨を切断したり、角、骨を削ったあとが確認された。このような結果から、14万年前に少なくともこの日本列島の東北の地にナウマン象、カモシカなどを狩猟し、食用にしていた人類がいたことが明確になった。

つまり、我国の人骨の出土状況は、山下町洞人(約3万2000年前)(前述)や港川人(約2万年前)が最古例であるが、遺物、遺構の発見状況は約14万年前までさかのぼることができるということである。この年代は中国大陸の原人遺跡とほぼ同年代の古さとなり、日本列島に住み着いた原人類たちはアジアでも早い段階の人々と言える。

(逆説の日本古代史、水野 祐 監修)

旧石器捏造事件は、日本各地で「～原人」ブームを巻き起こした日本の前期・中期旧石器時代の遺物や遺跡だとされていたものが、発掘調査に携わっていた考古学研究者の藤村新一自ら事前に埋設した石器を自ら掘り出して発見したとする捏造だったと発覚した2000年の事件である。上高森遺跡をはじめ、座散乱木遺跡・馬場壇A遺跡・高森遺跡など、多くの遺跡が旧石器時代の史跡としての認定を取り消されたりした。現在、旧石器時代の遺跡と公式に認定されているのは、砂原遺跡(出雲市)が最古(約12万年前)で玉随製剥片、石核、石英製の敲石(ハンマー・ストーン)などが出土している。それに続くのが金取遺跡(岩手県遠野市)(8-9万年前)で、石器(ハンドアックスのような両面加工石等や木炭粒が出土している。(藤田)

「出雲から国内最古の旧石器・・・12万年前の地層から出土」読売新聞2009・09・30 島根県出雲市の砂原遺跡で、中期旧石器時代(130000年前～35000年前)の約120000年前の地層から、国内最古級とみられる旧石器20点がみつかったと松藤和人・同志社大教授(旧石器考古学)を団長とする発掘調査団が発表した。

調査団によると、国内最古とされてきた金取遺跡(岩手県遠野市、約90000年前)を約30000年さかのぼる可能性がある。日本列島で人が活動をはじめた起源を遡る貴重な資料になるという。



●骨格から復元した北京原人

12万年前 日本最古の石器

島根県出雲市多伎町の砂原遺跡で、約12万年前の中期旧石器時代の地層から、国内最古級の石器20点が見つかり、同遺跡学術発掘調査団(団長「松藤和人・同志社大教授」)が29日、発表した。従来よりも数万年前さかのぼる。日本の前・中期旧石器時代については、「旧石器捏造事件」で、存在がほぼ否定される事態に陥ったが、今回の発見は、同時代の研究を再構築するうえで貴重な成果となる。(関連記事39面)

「旧石器」研究 再構築へ

石器は長さ5・2～11・5センチ、石英岩や流紋岩など。表面の状態で石を繰り返して、ただきつけるなどして加工したらしい。

調査地は丘陵地の斜面であり、今年8月、成瀬敏郎・兵庫教育大名誉教授(自然地理学)がナイフ状の石器1点を発見し、松藤教授らに調査を依頼。周辺を発掘したところ、19点が見つかった。出土地層のすぐ上の火山灰層を分析し

たところ、成分などから約11万年前に起きた三瓶山(島根県大田市)の噴火で堆積した火山灰と判明。すぐ下の地層は約12万8000年前にできたとみられることから、石器の年代を判断した。

2000年に東北旧石器文化研究所(解散)の元副理事長が、約70万年前とした宮城県栗原市の上高森遺跡などで出土した石器が朝鮮半島などで多く出土しており、日本にもあるはずだと考えてきた。今回の発見は、国内の研究の新たな始まりを意味する。

最初に見つかったナイフ状の石器(29日、松江市で)＝永井哲朗撮影

島根・砂原遺跡 20点出土

現地説明会は、10月4日午前10時半から、出雲市の多伎コミュニティセンターで調査報告会。主な石器は、10月10～25日、同市の県立古代出雲歴史博物館で展示する。

佐藤宏之・東京大教授(先史考古学)の話「捏造事件で研究は慎重になったが、同時代の石器が朝鮮半島などで多く出土しており、日本にもあるはずだと考えてきた。今回の発見は、国内の研究の新たな始まりを意味する」

旧石器時代 日本に原人？

旧人・新人(1)

ネアンデルタール人が描いた壁画か

新人が現れる前の欧州で独チーム「6万4000年以上前」

現在の人類ホモ・サピエンス(新人)が現れる前の欧州で、旧人のネアンデルタール人が洞窟に絵を描いていたとの調査結果を、ドイツの研究チームが22日付米科学誌サイエンスに発表した。壁画などに表れる記号を扱う思考は人類進化の根本的な始まりと考えられ、新人の特徴とされてきた。動物や手形などの絵を描いていた旧人も高い知性を持っていた可能性があるという。

研究チームは、スペインの3つの洞窟の壁に赤や黒の顔料で描かれた動物や直線、手形などを分析。顔料内のわずかな放射性物質を用いて年代を調べた結果、約4万年前との従来の解釈よりも古い、6万4千年以上前のものと判断した。欧州に新人が現れたのは4万5千~4万年前。研究チームは、スペインの壁画は新人が現れるよりも2万年以上前で、古くから欧州に進出していたネアンデルタール人によって描かれたと結論付けた。

(産経ニュース 2018.2.23 08:07)



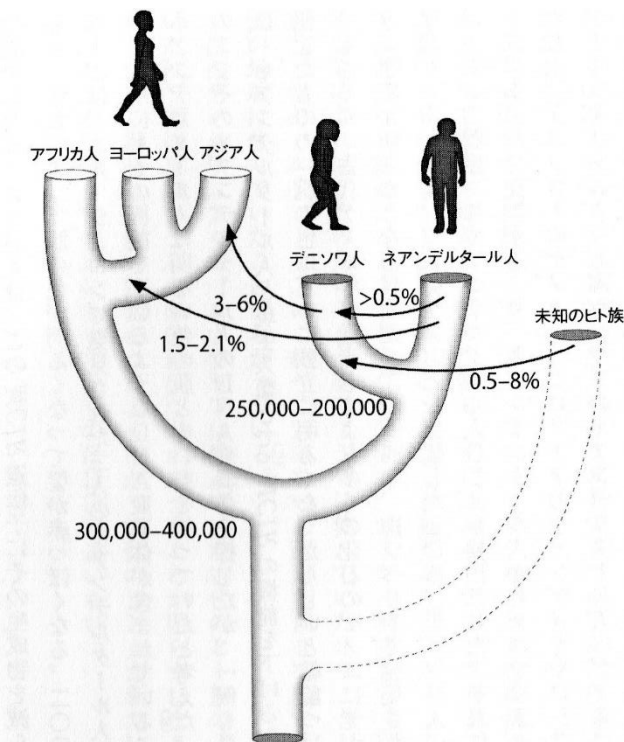
赤い線で描かれたスペインの洞窟壁画 (研究チーム提供)

現生人類(クロマニオン人)とネアンデルタール人等との混血

2010年ネアンデルタール人の核DNAの分析が完了した。ベーボ達は次世代シケンサーを使って解析したネアンデルタール人のゲノムのドラフトを発表したが、そのなかで、核DNAレベルで現生人類とネアンデルタール人が交雑している証拠が見つかった。ネアンデルタール人はアフリカ人よりも、出アフリカを成し遂げた集団が、中東のどこかでネアンデルタール人と交雑したと考えられる。混血の程度は2~5%と見積もられ、それほど大きいものではないので大規模な交雑があったとは考えられない。つまり、アフリカ人以外の現代人一人一人はネアンデルタール人の遺伝子を1.5~2.1%受け継いでいるが、全員が同じ部分を受け継いでいるわけではなく、多数の人々のもつネアンデルタール人由来のDNAを合わせると、ネアンデルタール人ゲノムの35~70%を再構築することができる。

2010年には古代人のDNA解析によってもうひとつの画期的な成果が公表されてる。シベリア西部にあるデニソワ洞窟の5万年~3万年前の地層で出土した人骨の臼歯と手の指の骨からDNAを抽出し、そのゲノム解析の結果が報告された。この人骨はネアンデルタール人もホモサピエンスとも異なる未知の人類のものだと結論付け、デニソワ人と呼ばれるようになった。この核ゲノム解析は約80万年前にデニソワ人とネアンデルタール人の共通祖先が現生人類と分岐し、それから後の約64万年前にネアンデルタール人とデニソワ人が分岐したことを示した。しかし、不思議なことにデニソワ人と東アジア人やヨーロッパ人との間には交雑が認められず、メラネシア人のゲノムの4~6%だけがデニソワ人固有のものと同じだった。このことは交雑の起こった地域も東南アジアである可能性が強く、デニソワ人はシベリアに居住していたわけだから、デニソワ人はシベリアから東南アジアまで非常に広い地域に分布していたことを示すことになる。デニソワ人と東アジアあるいは東南アジアの原人との関連に興味を持たれている。(右図、次のスライド右図)

また、サハラ以南アフリカ人の大規模なゲノム分析から、彼らのゲノムには2%程度の絶滅した人類のDNAが伝わっている。この未知の人類は70万年前に現生人類の祖先から分岐し、3万5000年前に前に中央アフリカでホモ・サピエンスと交雑したとされている。(DNAで語る日本人起源論、篠田謙一)



古代のゲノムと現生人類のゲノムとの比較によって明らかとなった、現生人類と2種の旧人類(ネアンデルタール人およびデニソワ人)との進化的関係の概略図。枝分かれの場所に、ゲノムに基づいて算出された分岐年代を記してある。ヒト族のある系統から別の系統へ向かっている細い矢印は、過去にそれらのヒト族の系統に属する人どうしが交雑したことによる遺伝子流動を表している。デニソワ人のゲノムの中にきわめて古いDNAが見つかったことで、100万年以上前にヒトの系統樹から分かれた、現在のところ「未知の」古代のヒト族の系統とデニソワ人とが交雑した可能性が高まっている。

(ゲノム革命-ヒト起源の真実、ユーージン・E・ハリス、水谷淳(訳))

新人・旧人(2)

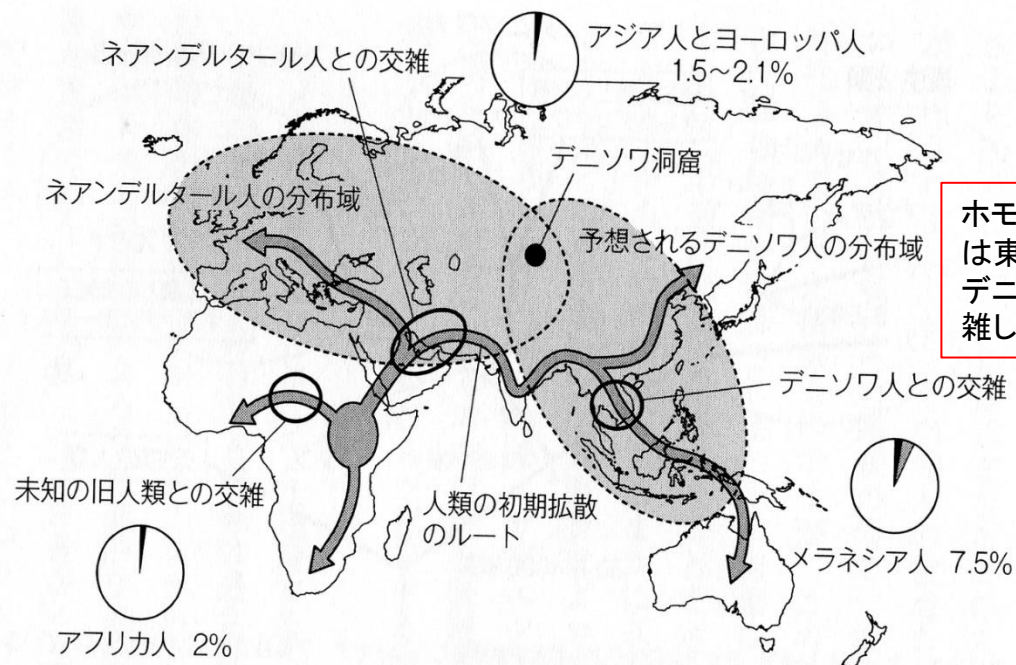
ホモ・サピエンスが旧人(ネアンデルタール人・デニソワ人)から受け継いだDNAと排除したDNA

ネアンデルタール人とデニソワ人のゲノムとホモ・サピエンスのゲノムの比較研究が進むと、ホモサピエンスノゲノムのゲノムの中には、ネアンデルタール人やデニソワ人から高頻度でDNAを受け取った領域と、全く伝えられなかった領域のあることがわかってきた。

これは、ネアンデルタール人やデニソワ人のゲノムの中に、ホモサピエンスが生きていくうえで有利になる遺伝子と不利になる遺伝子があることを意味する。数千世代の交雑の中で、生存に有利な遺伝子領域をもった個体は子孫を増やすが、不利な遺伝子領域をもった個体は子孫を残せなかった結果、このような状況が生まれてきたと考えられる。

解析の結果、ネアンデルタール人からホモ・サピエンスに体毛や体色に関する遺伝子が受け継がれており、ユーラシアの環境に適応してきたネアンデルタール人との交雑が、ホモ・サピエンスの寒冷気候への適応を可能にしたことが指摘されている。また、デニソワ人との比較によって、デニソワ人由来の遺伝子のなかには免疫機能に関係したものが示されている(TLR1, 6, 10)。チベット人の高地適応遺伝子もデニソワ人からもたらされたものであるとの指摘があり、極端に環境の異なる地域集団のゲノム解析が進めば、別の人類から引き継いだゲノムのカatalogはさらに大きなものになっていくであろう。一般に、ホモ・サピエンスが出アフリカを成し遂げた後に、短期間で異なる環境に適応できたのは、ホモ・サピエンスの遺伝子変化のみによるものでなく、生物学的交雑によって促進されたと考えられうる。一方、ホモ・サピエンス集団から排除された遺伝子の中には、言語に関係すると考えられているFOXP2遺伝子を取り囲んでいる領域がある。この周辺領域には、ネアンデルタール人に由来するものが全く見られないことが分かった。そのため、言語に関する遺伝子領域がネアンデルタール人と我々との違いを生み出している可能性が指摘されている。さらに、旧人との比較で、脳で発現する遺伝子の中に排除された領域があることが分かった。我々に中には知能に優れたものが勝ち残る、という強い思いがあり、脳で働く遺伝子の差異については、今後も注目されるだろう。実は、排除された遺伝子の中にはX染色体上にあつて精巣で発現するものがある。ネアンデルタール人由来のこの領域は、ヒトの生殖能力を低下させたと考えられるので、交雑によってホモ・サピエンスの集団にもたらされたものの、この遺伝子を受け継いだ個体では子孫を残すことが難しく、歴史の中で排除されていったらしい。

(ホモ・サピエンスの本質をゲノムで探る、人類の起源と進化、現代思想44巻5号、篠田謙一)



ホモサピエンスは東アジアでもデニソワ人と交雑した。

デニソワ人のDNAの謎解明か、16万年前にチベット高地に適応研究

2019年5月2日 AFP BB News

チベットの山岳地帯で見つかった初期人類デニソワ人の顎骨の化石から、人類はこれまで考えていたよりもはるかに早い時期に高地での居住に適応していたことが分かったとする論文が1日、英科学誌ネイチャーに掲載された。デニソワ人の化石がロシア・シベリア南部以外で発見された例はこれ以外になく、見つかった顎骨は少なくとも16万年前のものと思われる。専門家らは、現生人類(ホモ・サピエンス)の一部が低酸素の条件に耐えられるよう進化した謎を解く鍵になるとみている。

シベリア南部のアルタイ山脈にあるデニソワ洞穴で発掘された指節骨の破片1個と臼歯2個のゲノム解析により、約8万年前のデニソワ人のものとされた。しかし、チベットの僧侶が30年近く前に地元でたまたま発見していた化石から、研究者らは今回、デニソワ人はこれまで考えられていたよりもはるかに人数が多く、時代もはるか昔にさかのぼるとの結論を導き出した。

論文の主著者で、独マックス・プランク進化人類学研究所のジャンジャック・ユブラン氏は、「個人的な見解では、これは私が立てていた作業仮説を裏付けている。人類(新人)がチベット高原に到達したのは約4万年前とみられるとされていた。しかし、35万年前から5万年前の中国および東アジアの(ヒト族の)化石はおそらく、ほぼ全てデニソワ人のものではないかという仮説」を主張している。

■シベリアのデニソワ人になぜ低酸素症を防ぐ遺伝子変異が?

研究者らは2015年、高地に住むチベット人と漢人には、血液に酸素を行き渡らせるヘモグロビンの生成量を調整する遺伝子「EPAS1」に変異がみられることを発見した。チベット人から見つかった変異は、ヘモグロビンと赤血球の生成量を大幅に抑制し、標高4000メートルを超える高地に行ったときに多くの人が経験する低酸素症の問題を防いでいる。この変異は、標高700メートル未満のシベリアで発見されたデニソワ人のDNAで見つかったものとほぼ同じだった。ユブラン氏は、その理由は誰にもつかめていなかったとして、「デニソワ人が高地に住んでいたことは知られていなかったため、この遺伝子(EPAS1)は彼らの生存にとっては不要だ(と考えられていた)からだ」と説明し、こう続けた。「だが今、その理由が分かった。このDNAは(シベリアの)デニソワ人のものではなく、チベットのデニソワ人のものだったのだ」

新人の拡散(2)

新人の拡散

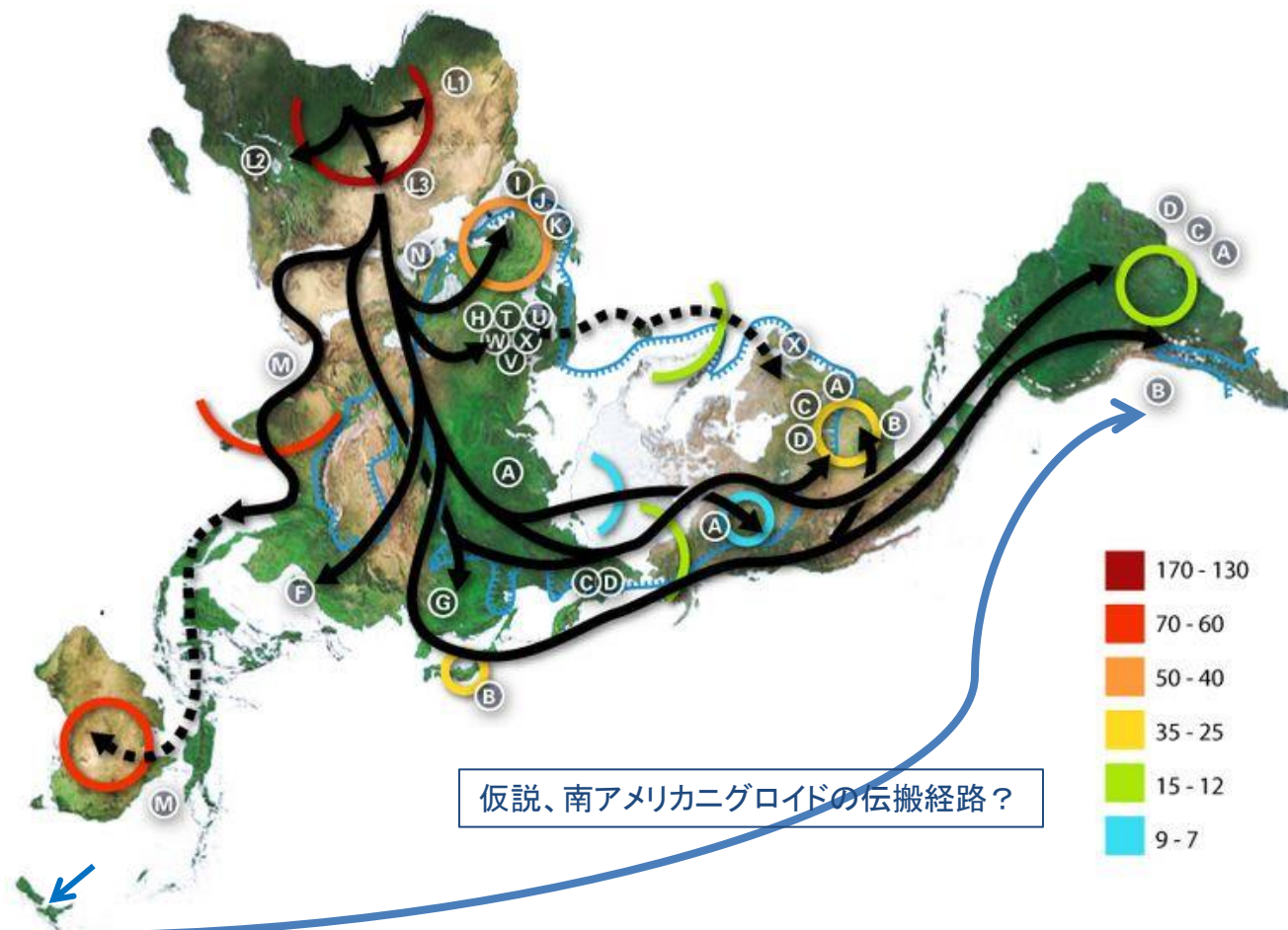
南米大陸のニグロイド

オーストラリアから南米大陸へ太平洋を渡ったアボリジニがいたと仮定する。南米大陸に黒人種がいた証拠が残っている限り、何らかの形で渡ったと考えなければならない。

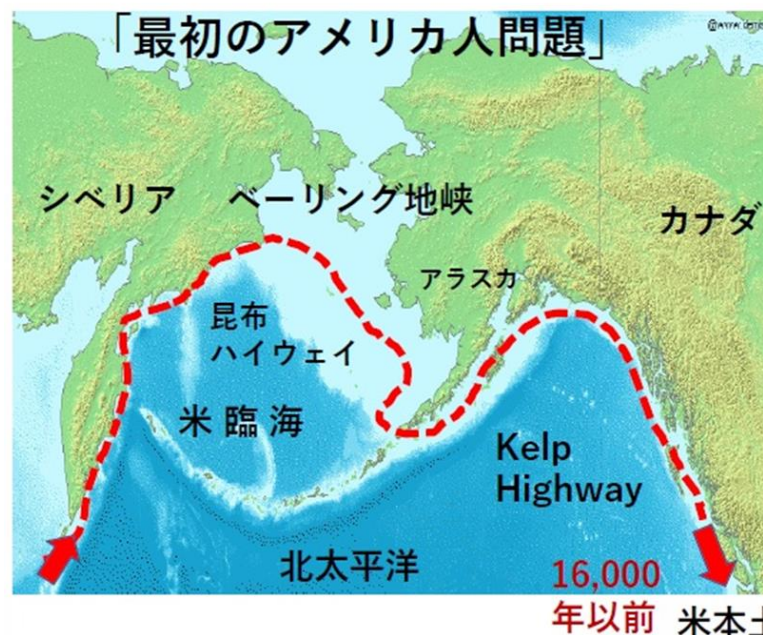
ブラジル北東部のセラ・ダ・カピバラという溪谷に洞窟がある。そこには何千という岩絵が描かれている。何を描いたのか解るものもあれば、意味不明のものもある。この地で発掘を行なった考古学者は4万年前の地層から石器を発見し、さらに5万年前の地層から炭と動物の骨、そして炉のようなものを発見した。これは、モンゴロイドがアメリカ大陸にやってくる遥か以前に人と思われる生物がいたことを意味する。モンゴロイドがアメリカ大陸にやってきたのは12000年前から9000年前にかけてだと言われている。それよりも4万年以上も前に、この謎の人々は住んでいたことになる。この謎を解く手掛かりが、ブラジルの北東部と南東部の洞窟で発掘された多数の人骨によってもたらされた。これらの人骨(特に頭蓋骨)を調べた結果、この人々がモンゴロイドでもなくヨーロッパ系の人々でもなく、ニグロイドだと解った。この人々は今のアボリジニであり、6万年前にオーストラリアに辿り着いたらしい。この間数万年の時が過ぎており、さらにアフリカとは違う環境を経てきたため、元のニグロイドとは多少の違いが起きていた。このアボリジニの一部が舟でオーストラリアの東のニュージーランドに向かい、さらに南米大陸の海岸に住むようになったというのが新しい仮説である。オーストラリア内陸部の舟の岩絵もこのことを傍証している。ブラジルで発見された多数の人骨は、完全なニグロイドではなく、アボリジニとニグロイドの両方の特徴を備えているのはこのような経緯によると考えられる。

ところで、このブラジルの北東部と南東部の洞窟で発見された、ニグロイドの特徴を持つ人骨の年代は12000年前から9000年前のものなのだ。この時期はモンゴロイドがシベリアから、陸続きとなったベーリング海峡を越えてアラスカに入り、アメリカ大陸全体に広まった時期でもある。これは何を意味しているのだろうか。モンゴロイドの人骨や遺跡は12000年以上前のもは何一つ発見されていない。その後わずか3000年の間に、モンゴロイドは南北アメリカ大陸全体に広がったと考えられている。ブラジルで発見された多数の人骨はこの時期、すなわち12000年前から9000年前のもので、これ以降彼らの人骨は全く発見されていない。もうお気付きだろう。アメリカ大陸にモンゴロイドがやって来た時期と、南アメリカでニグロイドが絶滅した時期がぴたりと重なるのだ。普通に考えれば、南米大陸のニグロイドはモンゴロイドによって絶滅させられた、と解釈できるだろう。

(南米大陸のニグロイドー現在未解決問題取扱所、Net 抜粋)



母系(ミトコンドリアDNAのハプログループの分布からから推定した人類伝播のルートおよび年代(出アフリカ-Wikipedia)



出アフリカ後、南ルートをとった新人(海洋民族)の一群は、東南アジアから北上して、台湾を経由して沖縄に入り日本列島に進出した(古華南人)。彼らの一部は、千島列島、カムチャッカ半島沿岸、アラスカ沿岸、北アメリカ西岸を経て南アメリカに至った可能性がある。所謂、昆布・ケルプハイウェイで、最初のアメリカ人(ニグロイド系)になったのか。(藤田)

(「最初のアメリカ人」最新説と北海道に、日本祖人」を探る！ Net)

新人の拡散(3)

最初にシベリアに進出した集団

シベリア地方バイカル湖付近にあるマリタ遺跡がある。この2万4千年前の集落遺跡からは女性や鳥の小像、蛇やマンモスを線刻した護符、マンモスの牙製の彫刻品など芸術性の高さを示すものが出土しています。現在より7~8度も低い最終氷期にも人類はこの地に定住していました。このマリタ遺跡から幼児2名の人骨が見つかった。その幼児の人骨からDNAが抽出され、全ゲノム解析が行われた。その結果は驚くべきもので、このマリタ1号と名付けられた3~4歳の幼児のミトコンドリアDNAは、ヨーロッパの後期旧石器から中期石器時代の狩猟民にもっとも多いハプログループUであり、Y染色体DNAの系統は現在の西ユーラシアに基本的な系統で、アメリカ先住民の系統の根幹に位置するものだった。さらに、核ゲノムは基本的に西ユーラシア集団のものであり、東アジア集団との類縁性は認められなかった。このDNA解析から2万4千年前にシベリアに進出した人々はヨーロッパ系統に属する人たちだったと結論した。一方、現在のシベリア先住民には、古い時代に起源するヨーロッパ集団の遺伝的な影響は認められないから、この分析が正しければ最終氷期最寒期以降の東アジア集団の北方への進出は、この地域でヨーロッパ系集団の影響を一掃してしまったということになる。

このマリタ1号の研究ではさらにアメリカ先住民との近縁性が解析され、アメリカ先住民の祖先のもっていたゲノムのうち、14~38%はこの集団から由来すると推定されています。アメリカ先住民は基本的に東アジア集団と共通の遺伝子を持っていますが、この結果はベーリング海峡を渡って新大陸に進出した集団が、どこかでこのシベリアに最初に進出したヨーロッパ系集団の遺伝子を取り込んだと考えられる。シベリアの後期旧石器時代集団と、最初に新大陸に到達した人たちが重なっていたために、現在のアメリカ先住民と西ヨーロッパ集団に遺伝的な共通性がみられることになる。実は1万年より古い北米の先住民人骨にはヨーロッパ的特徴があるとされており、これまで大西洋を介した交流があったという学説の根拠になっていたが、マリタ人骨の解析により、これはベーリング海峡の氷河期の陸橋を通じて伝わったものだという結論に変わると思われる。

(DNAで語る日本人起源論、篠田)

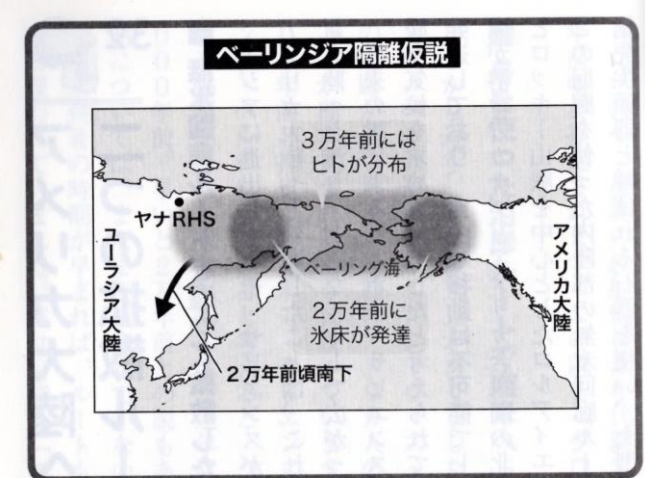
新人の北極圏からバージニアを通りアメリカ大陸への拡散

東シベリアまで広がったホモ・サピエンスは北上を続けた。ヒトは3万3000年前には北極圏の北極海から140キロほどの位置に存在するヤナRHS遺跡に到達していた。人類は3万年前までに、ベーリング海峡とよばれるベーリング海峡の陸橋に進出するが、その後の最寒期にできた氷床に阻まれて取り残される。この分断されたのはコーカソイド系の人々と思われ、なんとか居住可能な環境なバージニアで生き残った。この集団は2万年以上前に舟を使って大陸の西海岸ルートを下したと思われる。その頃はまだクローヴィス・ファーストと呼ばれるローレンタイト氷床とコルディア氷床との間の無氷回廊ができる前で、1万5000年前にこのクローヴィス・ファーストを通過してクローヴィス型槍先尖頭器をもつモンゴロイドの集団が南下し、1万年前には南アメリカ南端に達した。

クローヴィス型槍先尖頭器は強力に先に南下したコーカソイド系の集団を滅ぼし、また出アフリカ後南ルートでオーストラリアからニュージーランドに達し、さらに5万年前に南アメリカに到達していたニグロイド系のアポリジニをも絶滅させたという説もある。(ホモサピエンスの誕生と拡散、篠田 + 藤田)

最初のアメリカ人は誰か

1996年ワシントン州のコロンビア川河岸でコーカソイド人種の頭蓋骨の特徴をもつ人骨が見つかった。(このコーカソイドをケネウイックマンと呼ぶ。)その腰骨には石器が突き刺さっていた。この人骨を炭素年代法で検査されたところ、9300~9500年前の骨と判定された。このコーカソイド人種が1万年近く前に如何にして北アメリカ西岸に到達したかが大きな謎であった。(沈黙の神殿、大地舜) **しかし、数万年前シベリアに進出したコーカソイド系のシベリア先住民がベーリング海峡を越えて北アメリカに達したが、その後モンゴロイドのアメリカ進出により、これら先住民は滅ぼされたのではないか。ワシントン州で見つかった人骨はこのコーカソイド系先住民が北アメリカから姿を消す最後の時期に当たるのではないか。尚、最初のアメリカ人は、南ルートを取った新人(ニグロイド系)で、東南アジア、太平洋西沿岸(日本を含む)、北沿岸を経て、アメリカ西部沿岸に達したのが最初のアメリカ人とする説がある。(藤田)**



(ホモ・サピエンスの誕生と拡散、篠田謙一)

Y染色体ハプロタイプ解析

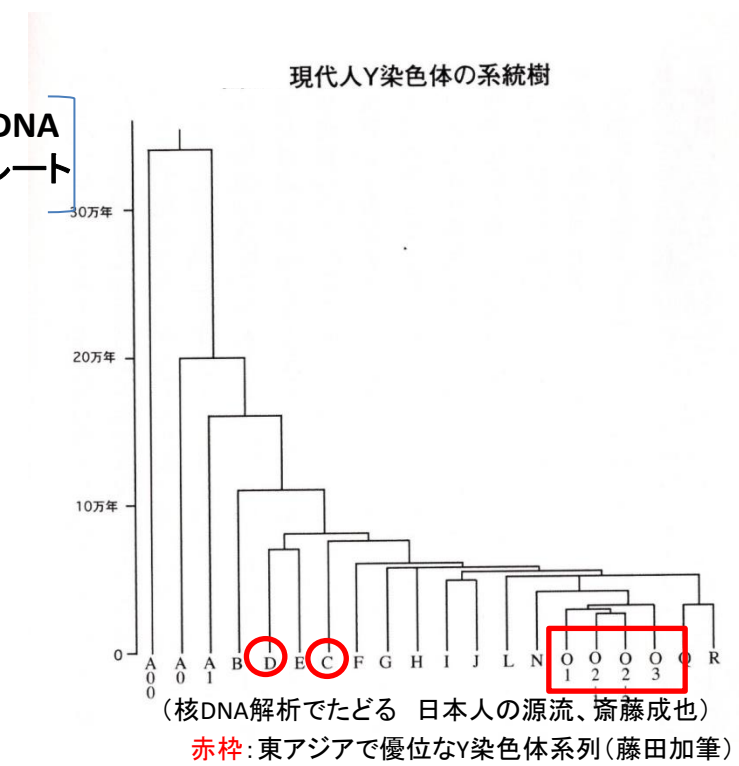
新人の日本列島への到達

父系から息子に受け継がれるY染色体DNA
Y染色体ハプログループD系列の移動ルート

D系列D2(日本特有の型)のISOGG名称の変遷: D2(2006) ⇒ D1b(2014) ⇒ D1a2(2019) ⇒ D1a2a(2020)

Y染色体ハプロタイプ解析は、Y染色体の一定領域を解析するだけであるので、全染色体を対象とする核DNA解析に比べると少量のDNA標品での解析が可能となる。

3.5万年前に、海洋民族の古華南人が台湾経由で、日本列島に到達した。その一群が、千島列島沿いに北上してアラスカ沿岸に至り、さらに南下し北アメリカに達した可能性がある。この古華南人が縄文人の基層となる。2万年前、古華北人が朝鮮半島経由(当時黄海は陸地化しており、必ずしも半島を経由する必要がない)で東北にまで侵入、さらに1.3万年西日本に侵入し、西日本縄文人となる。また、1.3万年前、古バイカル人が樺太経由で南下、東日本縄文人となる。



新人の列島への到達



D系統について

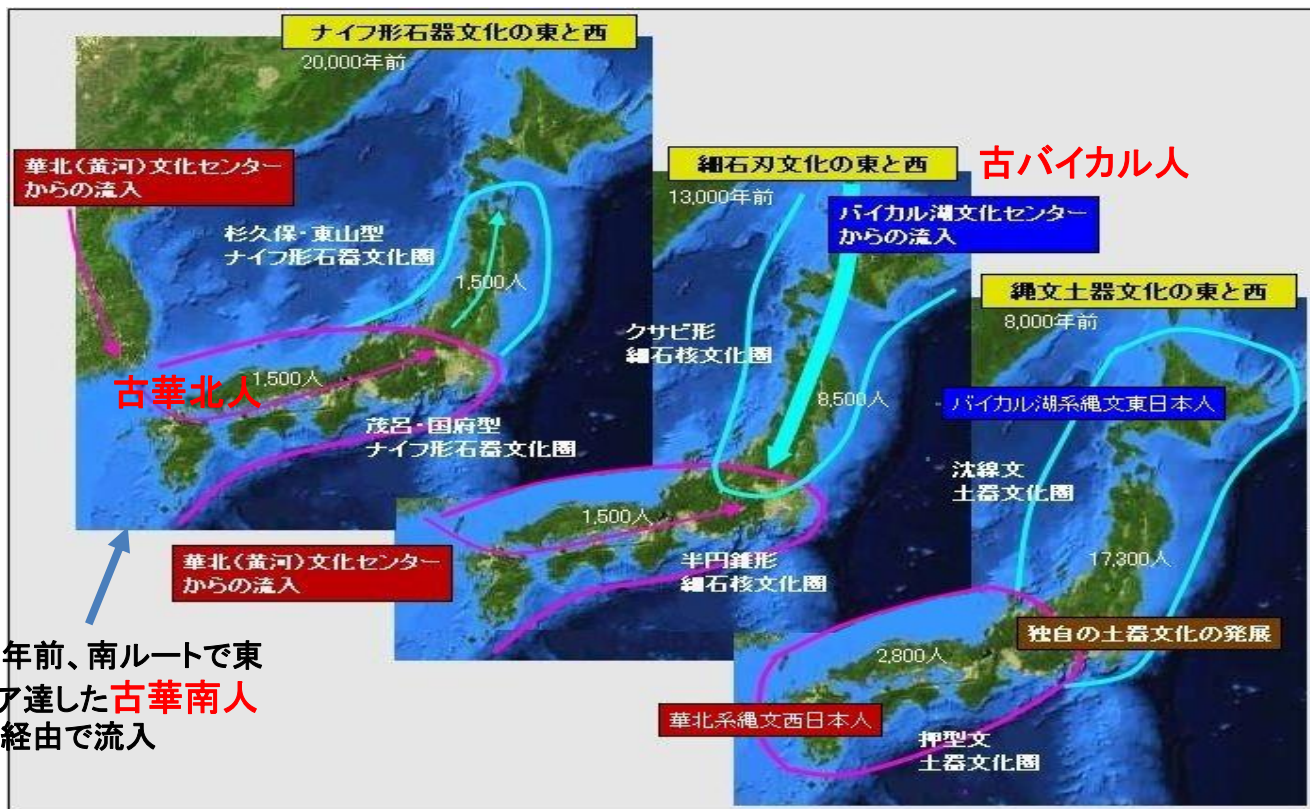
D2亜型(新D1a2)(縄文人)は、アイヌ、沖縄人で特に高く、本土日本人でもほぼ40%を占める最大グループである。崎谷は、この系統について、詳しく説明しているが、要約すれば次のとおりである。

- ① D2系統(D1a2)の移動ルート(ルート1)は、[北アフリカ→中東→中央アジア→華北→朝鮮半島→西九州]と推定される(20,000年前)。しかしベンガル湾東部のアンダマン諸島に別のD祖形(D1a3)が認められ、南ルートから華北を含む東ユーラシア全域に広ったという説もある。
- ② D2系列(D1a2)の13,000年前の移動は、[バイカル湖→樺太→北海道→東北]と推定される。後期旧石器時代以降、20,000年前と13,000年前以外に、この日本列島に大規模な集団の流入があったというような文化的な痕跡は残されていない。
- ③ 日本列島にはD2系統(D1a2)の、チベットにはD1(D1a1)の“特異的な集積”が見られ、いまでもユーラシア東部に低頻度ながらD系統が広く分布している。このことは、かつては東ユーラシア全体に分布していたD系統が、その後進出してきたO系統によって圧迫され、チベットと日本列島以外では少数派になってしまったと、推測される。
- ④ 新石器時代に、南朝鮮と西北九州に共通の漁撈民の文化の存在があるが、この民はD2系統(D1a2)のヒト集団であった可能性が高い。
- ⑤ ウィルス疫学の日沼頼夫が指摘した、HTLV-Iウィヤリアが西九州で比較的多いことは、この地が、D2系統(D1a2)の移動ルート(20,000年前)で、今でもここに高頻度に蓄積していることを、整合性をもって説明できる。その後(弥生時代)、朝鮮半島では大規模にO系統のヒト集団が流入したため、D2系統(D1a2)は絶滅寸前まで追いやられた。その結果、朝鮮半島では、HTLV-Iウィルスキャリアもほとんど消滅した。

注) D1a2=D1a2a, D1a3=D1a2b
(DNAでたどる日本人10万年の旅、崎谷 + 日本人の起源、伊藤 + 藤田)

根井・尾本のホモ・サピエンス拡散経路をベースとして、文化センターから列島への渡来、流入経路を書き加えると、上図のようになる。文化センターは革新技术を生み出した地域を指す。例えば、華北文化センター(古華北人)ではナイフ形石器を発明し、バイカル湖文化センター(古バイカル人)ではクサビ形細石刃石器を発明した。南ルートで東南アジアに達した華南文化センター(古華南人)が、古華北人(2万年前)や古バイカル人(1.3万年前)(より先に(4万年前)日本に達していたと思われる。
(日本人の起源、伊藤 + 藤田)

日本列島への新人の流入 古華南人・古華北人-古バイカル人

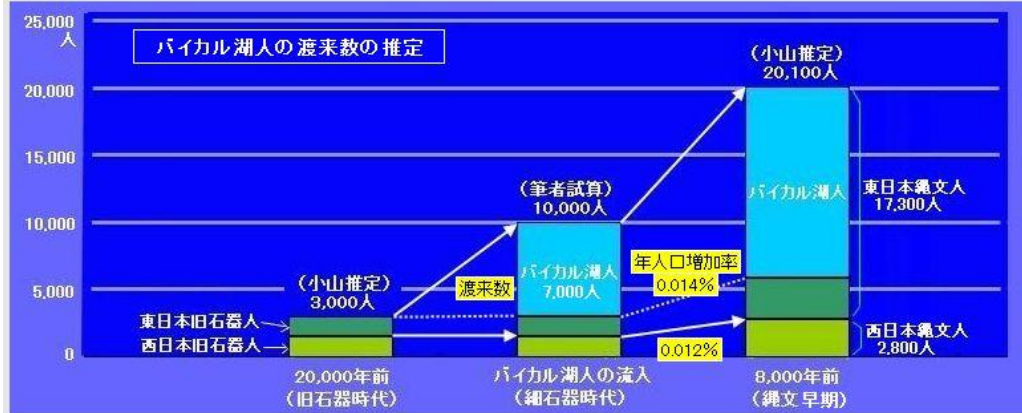


3. 5万年前、南ルートで東南アジア達した古華南人が沖縄経由で流入

(日本人の起源、伊藤)

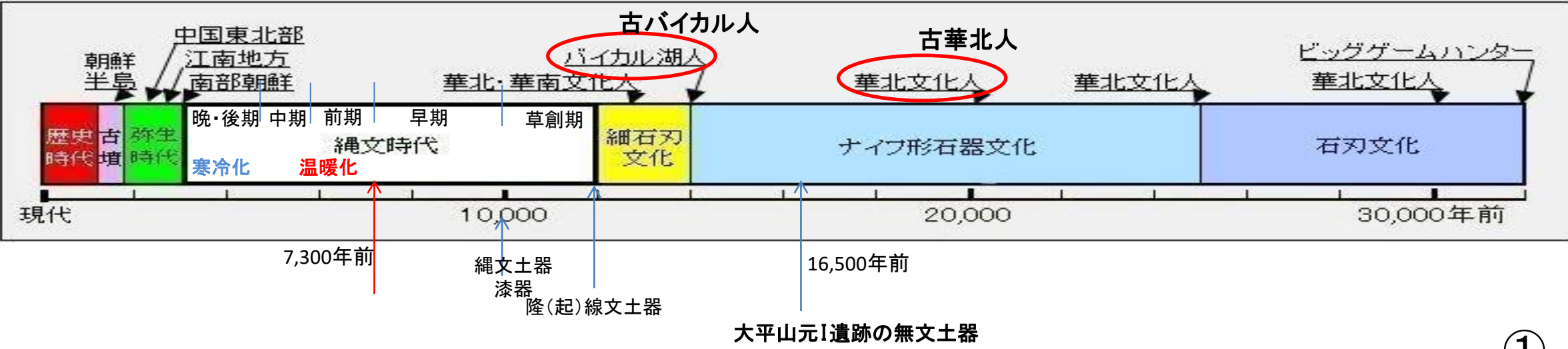
日本列島には前期旧石器時代の原人・旧人の骨や遺跡は見つからず、中期旧石器時代の砂原遺跡(出雲市)が最古(約12万年前)でそれに続くのが金取遺跡(遠野市)(8-9万年前)であり、石器(ハンドアックスのような両面加工石等)や木炭粒が出土している。これらの遺跡は、旧人あるいは原人の残存者の活動の跡と見なされる。新人と思われる山下町洞人(沖縄、約3万2000年前の子供の大腿骨と脛骨)の人骨出土が、国内では最古級であり、南ルートで列島に到達した可能性がある。

東ルートでアジアに到達し華北文化センターがたてた古華北人(Y染色体D2型)が、朝鮮半島経由でナイフ形石器を伴って断続的に日本列島に侵入してくる。その最大の集団の侵入は約2万年前であった。さらに、1.3万年前、古バイカル人(D2)はクサビ型細石刃を携え、樺太経由で東日本に南下。東日本縄文人の基層となる。また、同時期、華北文化人(D2)が半円錐形細石核を携え、西日本に進出。西日本縄文人の基層となる。



バイカル湖人の渡来数の計算手順
 ①バイカル湖人渡来時期は13,000年前とした。
 ②まず、20,000年前の人口を東日本、西日本とも1,500人とし、13,000年前まで増減しなかったと仮定した。すなわち、年人口増加率を0とした。
 ③細石器時代から縄文早期までの5,000年間の、西日本縄文人の人口は1,500人→2,800人であるから、年間の人口増加率は0.012%という極めて低い数値である。
 ④同じ期間の東日本縄文人の年間人口増加率を、西日本より若干高い0.014%に設定すると、17,300人から逆算して、バイカル湖人の渡来数は7,000人となる。

列島への新人および文化の流入

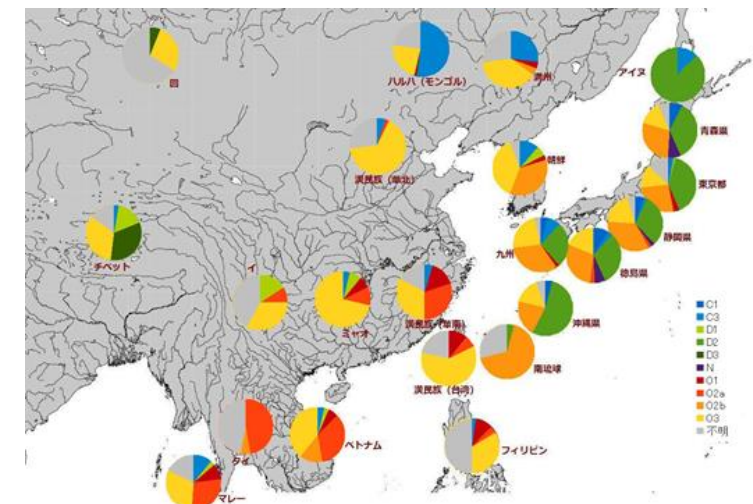


(日本人の起源、伊藤)

古華南人・古華北人・古バイカル人

D系列とO系列の移動と分布

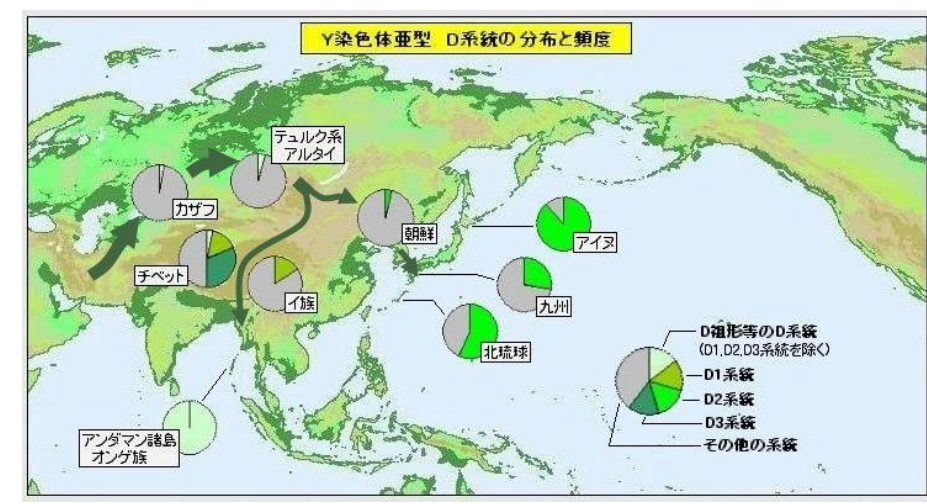
D系統は、日本列島人に顕著に見出されている。その他の地域では、ユーラシア大陸の高地に住むチベット人と、インド洋のアンダマン諸島人だけがD系統のY染色体を高い頻度で持っている。これら地域的に大きく隔たった3集団がD系統をもっているため、この染色体の系統はかなり古い時代に生じたものと予想される。実際にD系統は出アフリカの前後に他の系統から分岐している。なお、D系列と最も系統的に近いのはE系統であり、この系統に含まれる人間の多くは人間の多くは、アフリカに分布している。(核DNA解析でたどる 日本人の源流、斎藤成也)



Y染色体ハプロタイプ

Y染色体ハプロタイプ解析 (右図参照)

- ① 日本列島におけるD系統は、東京の1例や場所不詳の1例をD1亜型(新D1a1)の散発例として、他はすべてD2亜型D1a2a(D1a2)である。それは、アイヌ、沖縄人で特に高く、本土日本人でもほぼ40%を占める最大グループである。列島におけるD系列ハプロタイプは、D2⇒D1b ⇒D1a2(⇒D1a2a(ISOGGでの名称)と変遷している。瓊瓊杵(ニニギノミコト)のハプログループはD1a2a(D1b(D-M64.1))であると推測され、饒速日(ニギハヤヒ)のハプログループはD1a2a(D1b1c1(D-CTS1897))と推定されている(著名なY染色体 D系ハプログループ、Net)。
- ② O系統の移動ルートは、[北アフリカ→中東→東南アジア→華南→朝鮮半島(または西日本)]とされる。華南からの移動開始の時期は新石器時代で、10,000年程度前とD系列の移動よりかなり新しい。O系統は、東アジア南部にO2a(O1a)系統が、東アジア北部にO2b系統(O1b2)が、東アジア全域にO3(O2)が分布している。日本列島でD2(D1a2a)に並ぶ、高い頻度を示すO1b2とO3(O2)は、朝鮮半島では圧倒的に大きな集団を構成している。O2bは、O1b1(東南アジア)とO1b2(東アジア)とに分岐している。
- ③ O2b(O1b1とO1b2)の最新共通祖先年代となると、僅か3,300年前で、南で生じ東北に移動を開始し、南朝鮮および日本にたどり着いたのは2,800年ほど前からとされ、渡来系弥生人となる。O3(O2)(華北で生じ漢民族が主体)の朝鮮半島への進出もほぼ同時期と思われる。日本へのO3(O2)の進出は古墳・飛鳥時代であろう。従って、縄文時代には半島および列島へのO系列の進出はなかった。
- ④ ミトコンドリアの解析では、日本人と韓国人の女性の相関性は極めて高い(80%)。(日本人の起源、伊藤 + 藤田)



O系列の移動ルートについては、O系統の祖先型が出アフリカ後南ルートで東南アジア(あるいは華南)に移動し、そこでO系統が発祥した(17,000年前)。O系列の華南でのO1(新O1a)、O2(O1b)とO3(O2)型への分岐の時期は1万年以上前と思われる。O1(O1a)とO2(O1b)系列は華南で拡がり、O2(O1b)型はO2a(O1b1)とO2b(O1b2)型に分岐した。O3(O2)系列は気候の温暖化で北方のアルタイ山地・モンゴル高原に移動し、寒冷に適応し、さらにヒブシサーマル期に入り繁栄した。縄文時代後期に気候が寒冷化しはじめるとO3(O2)型は華北に移動し始めた。O3(O2)型はさらに人口を増やし古モンゴルや古華北人のD型やC型を圧倒した。さらに春秋・戦国時代になると華南のO1(O1a)とO2(O1b)型を圧倒した。O1(O1a)型は台湾やフィリピンなどの島嶼部へ、O2a型(O1b1)は東南アジアへ、またO2b型(O1b2)は東に向かい南朝鮮や日本列島西部に逃れた。従って、弥生時代、呉や越などの滅亡により列島に渡来した江南人はO2b(O1b2)型で、直接あるいは半島経由で列島に渡来した。その時期は弥生時代前期・中期と思われる。

華北人(O3(O2)型)は、河北、遼西、遼東さらに朝鮮半島北部に侵攻し、燕を建てた(前1,100年頃)。紀元前3世紀、燕は半島に進出し、南朝鮮に真番郡を置いた。紀元前2世紀には漢民族(O3(O2)型)が半島西北部を進出し楽浪郡を設けた。列島にO3(O2)型が進出し始めたのは、弥生時代後期さらに古墳・飛鳥時代と思われる。(DNAでたどる日本人10万年の旅、崎谷 + 藤田)

D系統の移動ルート

ルート2

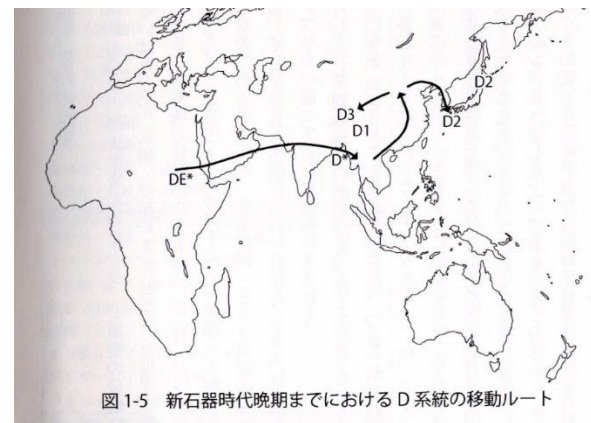


図 1-5 新石器時代晩期までにおける D 系統の移動ルート

O系統の移動ルート

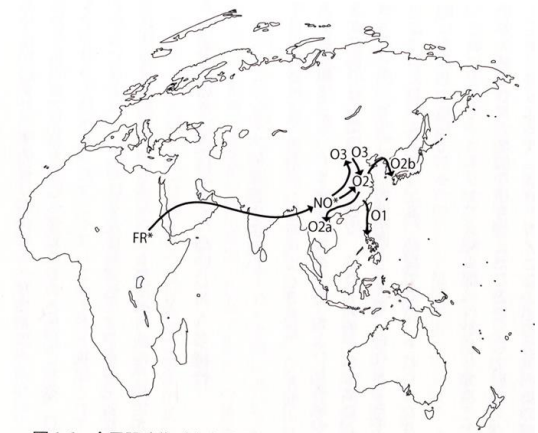


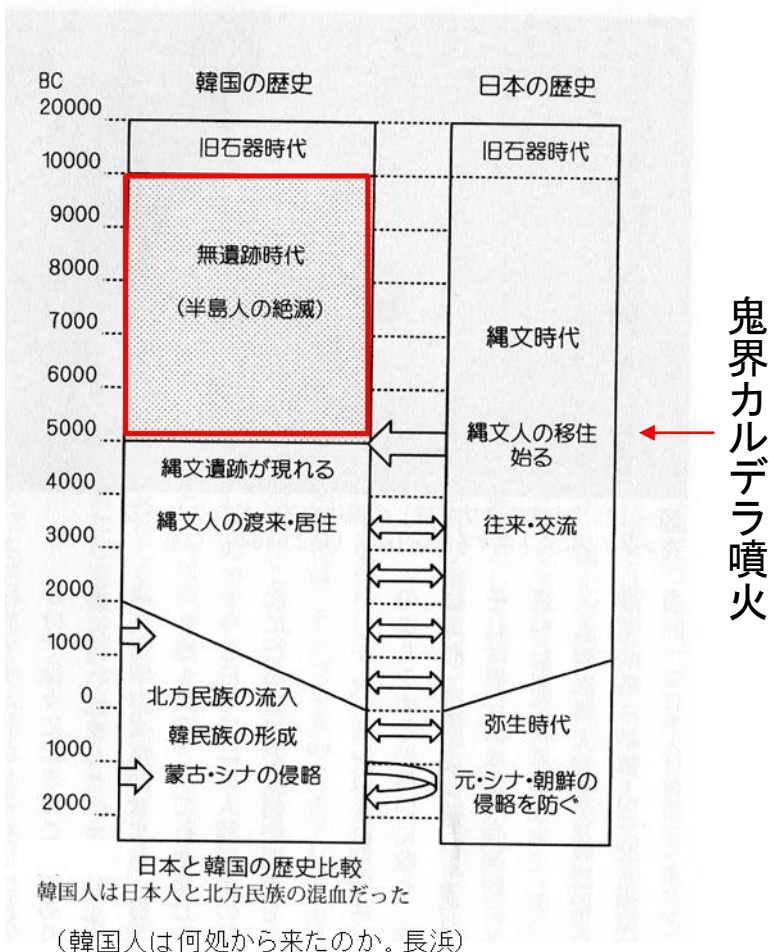
図 1-6 金属器時代(弥生時代)までにおける O 系統の移動ルート

(DNAでたどる日本人10万年の旅、崎谷)

縄文時代早期・前期の境(7,300年前)に鬼界カルデラ噴火が起こり、九州南部と四国の西日本縄文社会が壊滅。この災厄の避難民(西日本縄文人(D1a2a))が当時殆ど無人化していた南朝鮮と琉球に移住。



鬼界カルデラから噴出した火砕流の分布域(オレンジ色の部分)とこの噴火で降り積もった火山灰の厚さ分布
 出典：町田・新井,『新編 火山灰アトラス』2003より



南朝鮮(韓国)の先住民は、縄文時代早期終末の鬼界カルデラ噴火の災厄から逃れるため半島に渡った倭人(縄文人)であり、彼らはその後も北九州や日本海沿岸の倭人と密接な交流をしていた。(藤田)

鬼界カルデラ噴火

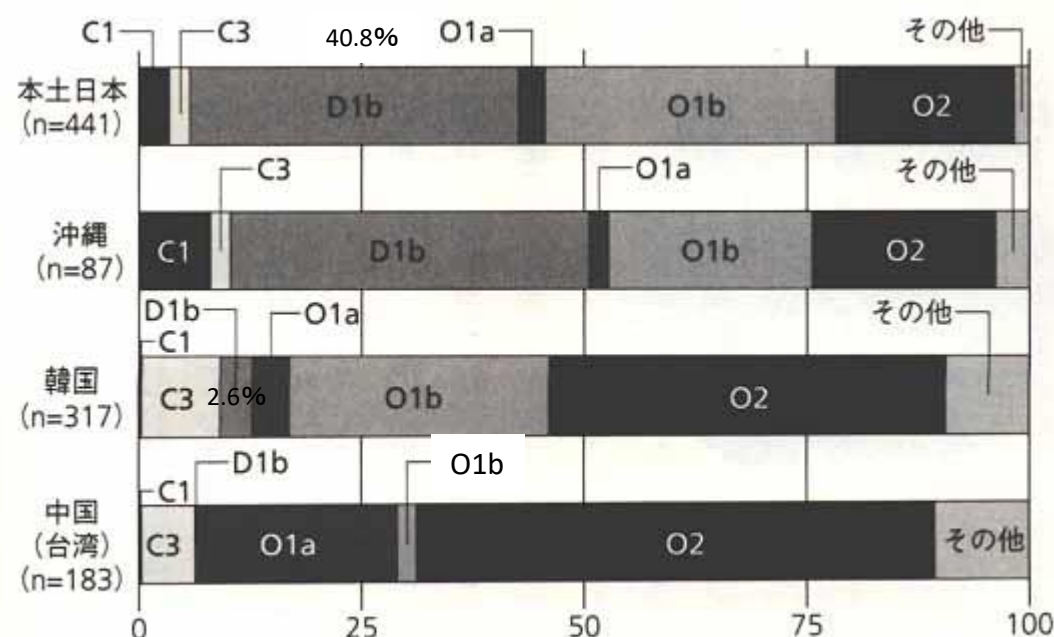
琉球人(D1a2a)の成立



琉球人は、7300年前頃、ほとんど無人の沖繩に渡って貝塚時代をもたらした鬼界カルデラ噴火の避難民(西日本縄文人)を先祖とする。さらに南九州の倭人が弥生時代以降に沖繩に移動することにより成立した。(日本人の起源、伊藤 + 藤田)

7300年前 鬼界カルデラ噴火

東アジアのY染色体ハプロタイプ



注)
 C1=C1a1
 C3=C2
 D1b=D1a2a
 O1b=O1b1+O1b2

図5-10 日本とその周辺のY染色体ハプログループの地域比較 (Nonaka et al. 2007を改変)

漢族(中国)	C1+C3 =6.0	D1b=0.1	O1a=9.6	O1b=16.3	O2=55.4	その他=10.8
--------	---------------	---------	---------	----------	---------	----------

(Wikipedia抜粋 Y染色体ハプログループの分布(東アジア))

D系列ハプログループD2 (=D1b, D1a2a) 型の分布は (アイヌ : 関東 : 西日本 : 沖縄 = 87.5 : 48.2 : 26.8 : 55.6 (%)) となる。O 系列 (O1b (=O1b2) と O2 (=O3) の比率は、日本人は 49% であるが、西日本では 61% に達する。韓国人は、中国人などの東アジア人と比べると、D 系列の比率が 2.6% と有意に高い。これは、南朝鮮の原住民が D 系列の西日本縄文人であったためであると思われる。また、朝鮮半島からの O 系列 (O1b と O2) の移住ルートと思われる、北九州 - 瀬戸内海沿岸 - 近畿地方 - 東海地方から関東地方の太平洋岸において、O 系列の頻度が顕著に高い。

日本現代人と古代人のY染色体DNA解析の結語

旧石器時代後期に、出アフリカを果たし南ルートをとって、東南アジアに達した新人の一部 (古華南人 C1) は大陸沿岸を北上して少人数で日本列島に至った (3.5 万年前)。ついで、東ルートを取って、東アジアに到達した新人集団 (古華北人) の一団は北上してバイカル湖岸に到達した (古バイカル人)。古華北人 (D2=D1b=D1a2a) は朝鮮半島を經由して日本列島に進出し東北まで達した (2 万年前)。その後、古バイカル人 (D2) が樺太経由で南下し、東日本に侵入して、東日本縄文人 (蝦夷) となった (1.3 万年前)。古華北人系の縄文人は西日本縄文人となった。

縄文時代早期末に 7300 年前破局的な鬼界カルデラ噴火があり、その避難民 (西日本縄文人、D2) が当時殆ど無人であった、南朝鮮と沖縄に渡った。従って、南朝鮮の新人の原住民は西日本縄文人であり、また琉球人の祖先もまた西日本縄文人ということになる。アイヌ人は、東日本縄文人 (原アイヌ人、蝦夷) と平安・鎌倉時代に北海道に移入したオホーツク人との混血である。

縄文時代末に気候の寒冷化があり、東日本縄文人が南下し西日本縄文人とが混ざった。弥生時代になると江南系の渡来人 (O1b) が渡来してきたが縄文人の Y 染色体型 D2 を大きく変動させる規模ではなかった。紀元前後には、中国人と朝鮮人の南下に圧迫され、南朝鮮の西日本縄文人 (倭人) (D2) が帰来した。古墳時代から飛鳥時代にかけて、朝鮮半島から多数の中国人 (O1b と O2) と朝鮮人 (高句麗系) (C3) の渡来があった。

これらの民族移動を彷彿とさせる、東アジア人のミトコンドリア DNA 解析と核 DNA 解析の成績を次スライド以降に示す。

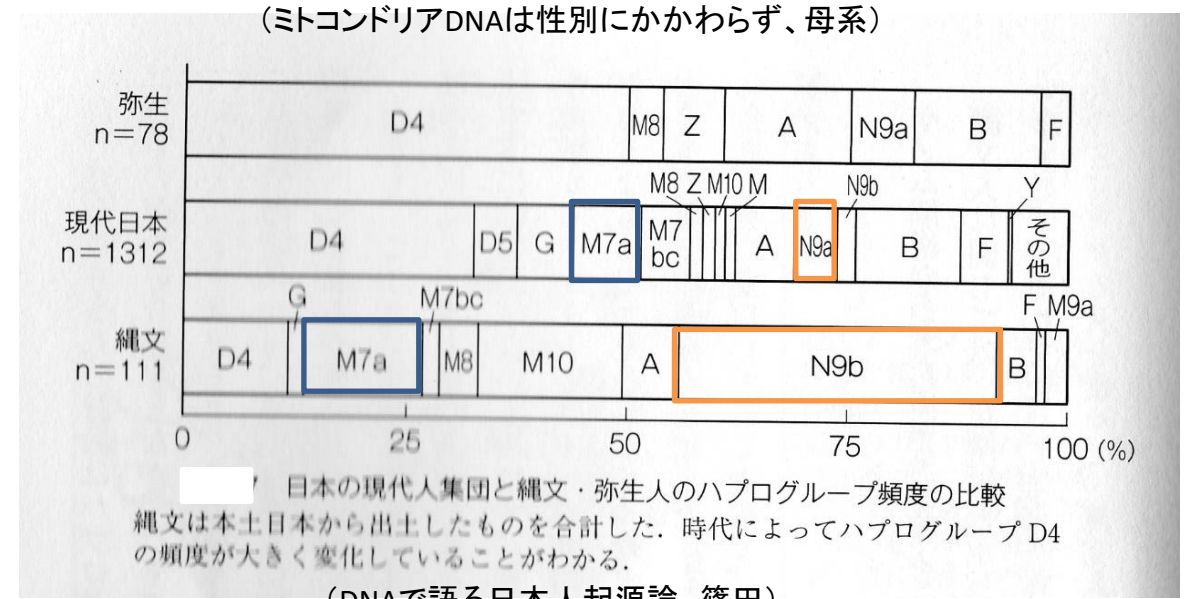
(藤田泰太郎)

母系で受け継がれるミトコンドリアDNA解析

縄文時代、現在

核DNAは細胞当たり2コピーが普通であるがミトコンドリアは数百コピーあり、サイズも核DNAの数千分の1である。従って、古代人や大古人の出土人骨からミトコンドリアDNAを極少量でも抽出できれば解析できる。かくて、現在でも古代人や太古人のDNA解析ではミトコンドリアDNA解析の成績数が他のDNA解析を凌駕している。

Y染色体ハプロタイプは父系遺伝であり、民族の集団が男性を中心に侵略的に新たな地に移動するとき、まず敵の男性を殺戮し残った女性を犯し、自分のY染色体ハプロタイプを男の子に伝える。そこで1世代遅れて、女性もまた自分の子供を連れて新たな民族移動に加わる。従って、Y染色体ハプロタイプに比べるとミトコンドリアハプロタイプは遅れて動き、さらに、女性はミトコンドリアハプロタイプの起源地に留まる傾向が強い。かくて、母系のミトコンドリアのハプロタイプの起源地が類推がある程度可能である。(藤田)



縄文人や弥生人のミトコンドリアDNA解析

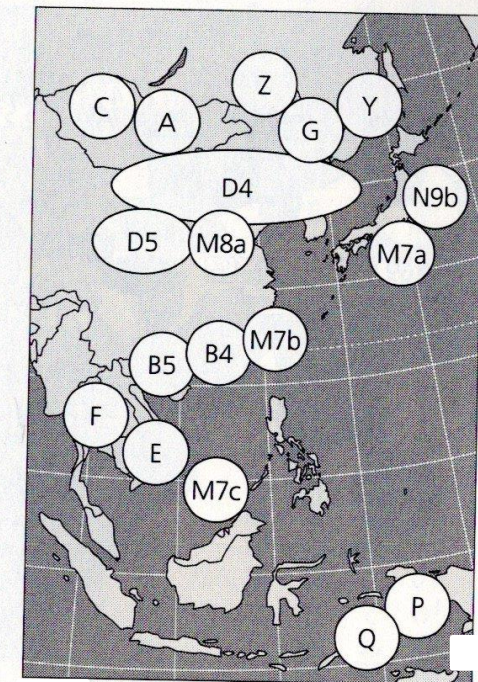
縄文人のミトコンドリアDNA解析(右図)でハプログループが決定できたのは、111個体で多いハプログループはN9bとM7aであった。北方系縄文人(古バイカル湖人系)はN9bで南方系の縄文人(古華北人系)はM7aである。

現代人で見ると、M7aの人口に対する集積の最も大きいのはチベットで、その周辺のネパールやシッキムでも大きい。その他の地域では日本、韓国、モンゴルなど中国を取り巻く地域にもかなりみられる。このことからM7aの起源地は東南アジアにあり、最終氷期の末頃にそこから雲南-チベットと東アジアという、二つの異なる方向に拡散したと考えられている。東アジアに向かった集団の一部が朝鮮半島(当時黄海は陸地化しており、必ずしも半島経由とは云えない)を通過して日本に流入したと思われる。

チベットには日本集団と近縁のハプログループの集積のあるものとして、Y染色体のハプログループD1(D1a1)が存在し、アンダマン島にはD3(D1a2b)が存在する。ハプログループD2(D1a2a)は日本では人口の3割程度を占めているが、朝鮮半島や中国にはほとんど存在しない。(韓国にはD1a2a型が僅かに認められる。)ハプログループDの祖先型がアンダマンなどの東南アジアの北西部地域にあると推定されている点でもM7aと同じですから、あるいは両者は一緒にうごいたのかもしれない。

現代日本人が縄文人と渡来弥生人の混合によって形成されたとして、現代人から縄文人と共有する遺伝的要素を取り除くと、残った要素は渡来弥生人によってもたらされたと考えられる。すると、渡来弥生人と共通性が高いのは中国北東部や朝鮮半島の集団となる。このように渡来弥生人によってもたらされた要素は大陸の比較的狭い地域からもたらされた可能性が高い。

(DNAで語る日本人起源論、篠田)



東南アジアから東アジアにかけての地域におけるミトコンドリアDNAハプログループの分布の中心地

(日本人になった祖先たち、篠田)

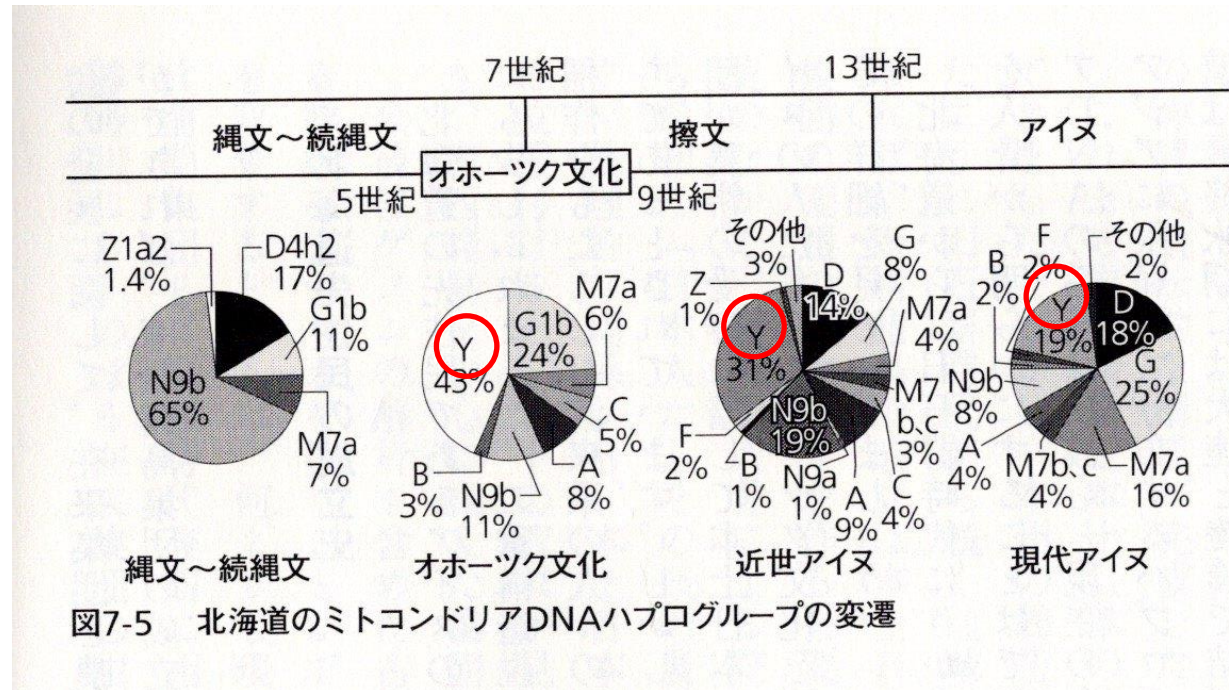
ミトコンドリアDNA解析

アイヌ人のミトコンドリアDNA解析

現存のアイヌ人は、蝦夷(古アイヌ人)と平安・鎌倉時代に北海道に渡来したオホーツク人との混血！！

アイヌと蝦夷

ミトコンドリアDNA解析



上図は、北海道のミトコンドリアDNAハプログループの割合の、時代的な変遷を示したものである。東日本縄文人(原アイヌ人、蝦夷)にはなかったハプログループYがオホーツク文化人によってもたらされ、両者の混合によってアイヌ人が誕生した様子が見て取れると思う。
(日本人になった祖先たち、篠田)



(「最初のアメリカ人」最新説と北海道に、日本祖人」を探る！ Net)

縄文時代草創期1.3万年前、古バイカル人がクサビ形細石刃石器を携え、バイカル湖畔より、樺太経由で南下、北海道・東日本に侵入し、東日本縄文人(原アイヌ人、蝦夷)になる。古華北人は2万年頃よりナイフ型石器を携え朝鮮半島経由で断続的に列島に侵入していたが、1.3万年前、西日本に半円錐形細石刃石器を持ち込み、西日本縄文人となる。縄文後期・晩期に東日本縄文人が南下し、西日本縄文人と混ざる。弥生人は倭人と呼ばれるようになる。さらに、古墳時代、飛鳥・奈良時代に入り、平安・鎌倉時代に、カムチャツカ半島、アムール川下流域、サハリンの諸民族が混雑したオホーツク人が、北海道に侵入、日本人(東日本縄文人(原アイヌ人、蝦夷))と混ざりアイヌ民族とよばれるようになる。この混雑は小規模なもので、現在のアイヌ人が北海道の原住民だとはとてもいえない。(藤田)

核DNA解析

次世代DNAシーケンサーの登場により、ごく少量の核DNAより膨大な塩基配列情報が得られるようになり、古代人のごく少量のDNAサンプルでの核DNA解析が可能となった。

韓国人は、倭人(西日本縄文人)と大陸人との混血か

東アジアにおける人類集団の遺伝的解析

核ゲノム解析は全ての染色体を解析の対象とするため、極めて多数の遺伝子配列情報を比較解析することができる。東アジアにおける人類集団の遺伝的関係を示す主成分解析(図1, 2)では、ウイグル人(祖先集団B)、ヤクート人と同様にアイヌ人もまた上側へずれている。このことは、アイヌ人へのウイグル人(コーカソイド系)の遺伝的形質の流入を推察させる。一方、下方に直線状に位置しており遺伝的集団連関が認められるのが、アイヌ人(祖先集団A)、オキナワ人、ヤマト人と韓国人であり、アイヌ人がもっとも上方で、オキナワ人、ヤマト人、韓国人が続く。これは縄文人の影響を示す、すなわちアイヌ人がもっとも濃密に縄文人のDNAを受け継いでおり、それにオキナワ人、ヤマト人がつづき韓国人も弱いながら縄文人のDNAを含んでいると推察される。(核DNA解析でたどる日本人の源流、斎藤成也) さらに、篠田らにより解析された、福岡や長崎の弥生人を含む人類集団の遺伝的関係(次スライド図)で注目すべきなのは、韓国人は縄文人と大陸人の混血と考えることである。斎藤氏と篠田氏の2研究グループが公表した東アジアの人類集団の遺伝的関係から、「韓国人は南朝鮮の倭人(西日本縄文人(原住民))と大陸人との混血である」という結論に達する。

縄文早期末の鬼界カルデラ噴火ののち、西日本縄文人が南朝鮮に避難した。、それ以来、縄文時代晩期からの気候の寒冷化により、江南人、華北人、朝鮮人(ツングース系)が南下するまでは、南朝鮮は倭人(西日本縄文人)の居住地であった。そのため、縄文人の核DNAが現在の韓国人に有意に残っているのだと思う。尚、日本列島にのみ顕著にY染色体D系列(D2(D1a2a))が見られる。南朝鮮への江南人、華北人やツングース人の南下により、南朝鮮からD系列(D1a2a)はほぼ排除されたとはいえ、僅かだが有意に残存している。

(藤田)

図1 東アジアにおける人類集団の遺伝的関係
(Jinamら 2012, Fig. 3bより)

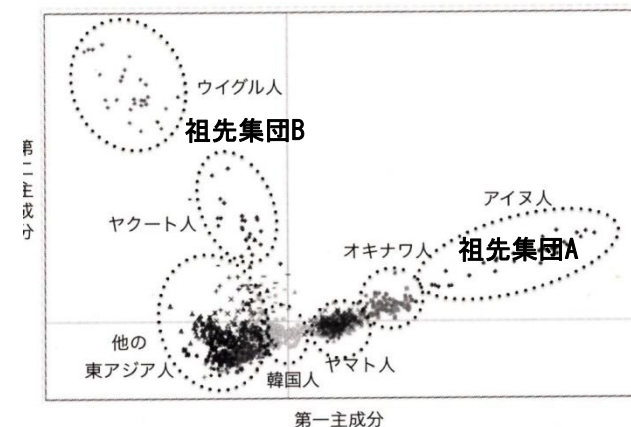


図2 アジア人6集団の個体ごとの混血解析結果
(Jinamら 2015, Suppl. Fig. 2より)

集団	祖先集団AとBの割合	
アイヌ人	99 : 1	~ 51 : 49
オキナワ人	33 : 67	~ 21 : 79
ヤマト人	21 : 79	~ 13 : 87
韓国人	3 : 97	~ 1 : 99
北方中国人	2 : 98	~ 0 : 100
南方中国人	2 : 98	~ 0 : 100

(核DNA解析でたどる日本人の源流、斎藤成也)

右図は船泊縄文人(東日本縄文人)と現在のアイヌの人たち、そして東アジアの現代人集団のSNPをもとに行った主成分分析の結果を示したものである。アイヌの人たちが帯状に分布しているのは、本土日本人との間の混血の影響だと考えられるが、船泊縄文人がその延長上に位置しません。この船泊縄文人からのズレは、アイヌの人たちにオホーツク文化人のDNAが入っていると考えると説明できる。

(日本人になった祖先たち、篠田)

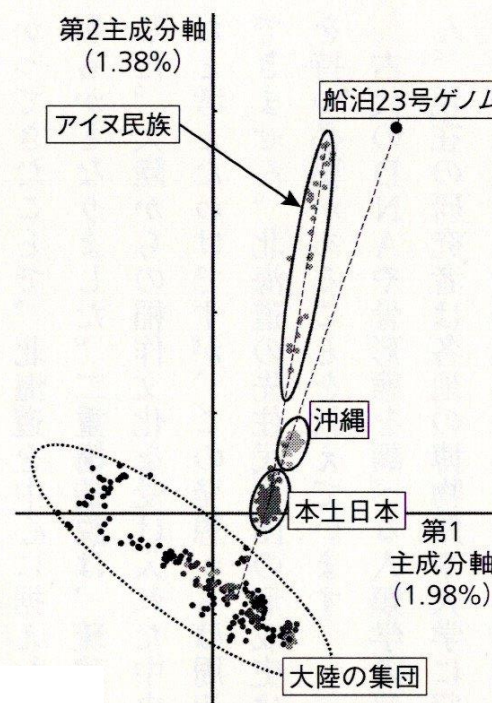


図7-6 アイヌ民族を含む東アジアの現代人と船泊縄文人のSNPデータを用いた主成分分析

弥生人DNAで明らかになった日本人と韓国人の起源 —朝鮮半島に渡った縄文人— (Net)

本稿は、NHK Eテレ：サイエンスZERO「弥生人DNAで迫る日本人の起源」2018年12月23日放映を見て、内容とそれが示す意味を述べたものである。

(解説は篠田謙一氏(国立科学博物館))

弥生人の核DNAが解析され、韓国人の核DNAの立ち位置が示された(主成分解析)(右図)。

■縄文人は東アジアの集団とは別起源で、その集団は種々のアジア人集団とは一直線上には位置していない。

■韓国人は、何となく北方のツングース系民族が半島に南下したものに、大陸の諸民族が侵入し混血したもの、と思っていた。従って、東アジア人集団の一直線上(の北京中国人あたり)に位置すべきと思っていたが、奇妙なことにその一直線上から離れている。韓国人は東アジア人が出自とは言い切れない、別の新しい混血集団のようだ。

核DNAでの、韓国人のこの立ち位置が意味するものは、韓国人は、ルーツを異にする縄文人とルーツを異にする大陸人の交雑で生じた新しい若い集団、ということになる。(異なる民族間の交雑による子供の核DNAは、両者の中間の位置にプロットされる。)(篠田謙一氏)

「韓国人は、縄文人と大陸人の混血」が意味することは、半島は元々列島からの縄文人が、先住民として住み着いた土地であり、その後、大陸北方から他民族が侵入してきて先住の縄文人と交雑し、両者の核DNAを有する半島人が誕生した、従って、弥生時代の半島人や半島系渡来人は先住の縄文人の末裔であり、縄文人の遺伝子を持っているということになる。

さらに、弥生人の核DNA分析の結果も図に示された。

1. 岩手の弥生人は、縄文人そのまま、弥生文化を受容した縄文人。
2. 九州(長崎、福岡)の弥生人は、渡来人の影響を受けて、下方に位置してる。

(福岡県那珂川市安德台遺跡(弥生中期)の、朱に覆われた甕棺に埋葬された弥生人女性は、骨格などから典型的な弥生渡来人と思われていた。ところが核DNA分析では、渡来系遺伝子の他に縄文人の遺伝子を持っていることが明らかになった。最近の篠田氏の研究によれば、安德台遺跡の渡来系弥生人豪族の核ゲノムの特徴は現代日本人の範疇に収まるとのことである。

篠田謙一氏は、

『一般的に、渡来系の人ということになれば朝鮮半島であるとか中国であるとか そういう人たちと同じ遺伝子を持っているんだろうと考えていたので、典型的な渡来人というのが、実はかなり縄文と混血しているという話になりますので、かなり意外な結果になりました』と驚いていた。

南朝鮮(韓国)の先住民は、縄文時代早期終末の鬼界カルデラ噴火の災厄から逃れるため半島に渡った倭人(縄文人)であり、彼らはその後も北九州や日本海沿岸の倭人と密接な交流をしていた。縄文時代晩期からの気候の寒冷化により、江南人、華北人、秦人や朝鮮人(ツングース系)の南朝鮮への侵入が激しくなり、南朝鮮の倭人との交雑も進んだ。前々スライドの斎藤氏らや本スライドの篠田氏らの現代と古代の東アジア人の核ゲノムの解析の結果は、南朝鮮の先住民は倭人(西日本縄文人)であることを明らかにした。尚、後漢の時代に、南朝鮮に居住する多様な中国人(彼らとの混血の進んだ倭人も含むか?)を韓人と称したことが、韓の呼称の始まりとの説がある。(藤田)



弥生人、母系は渡来系、父系は縄文系かDNA分析で判明

毎日新聞2019年3月3日 18時39分(最終更新 3月3日 18時50分)

(青谷上寺地遺跡のDNA分析について報告する篠田謙一・国立科学博物館副館長＝鳥取市尚徳町のとりぎん文化会館で解説)

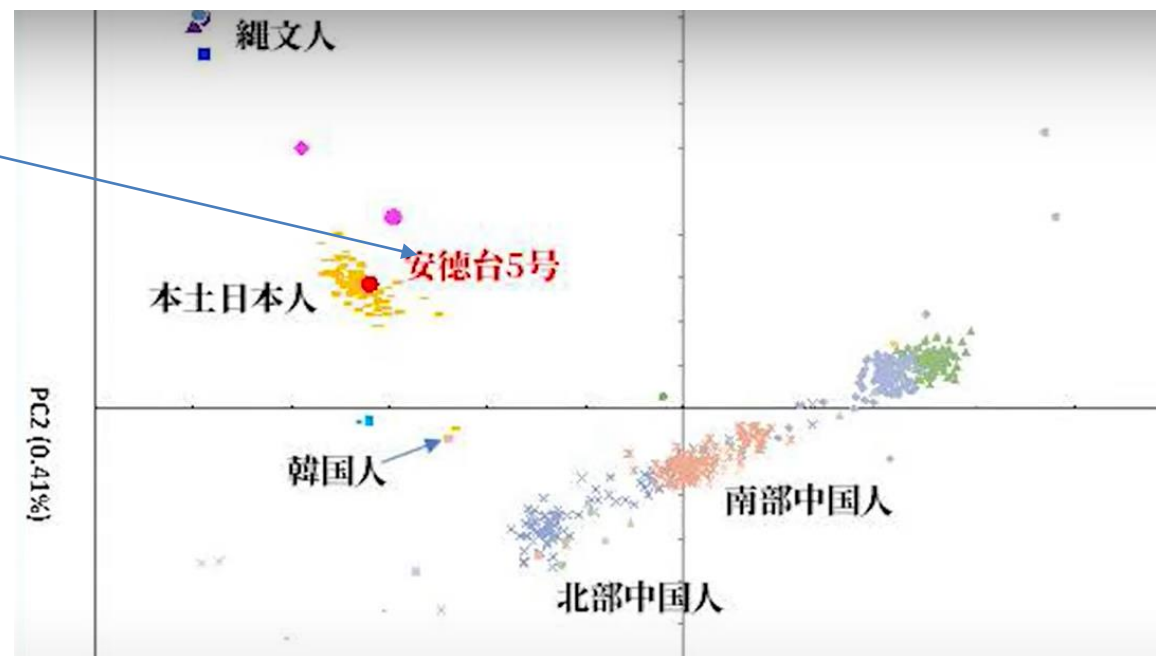
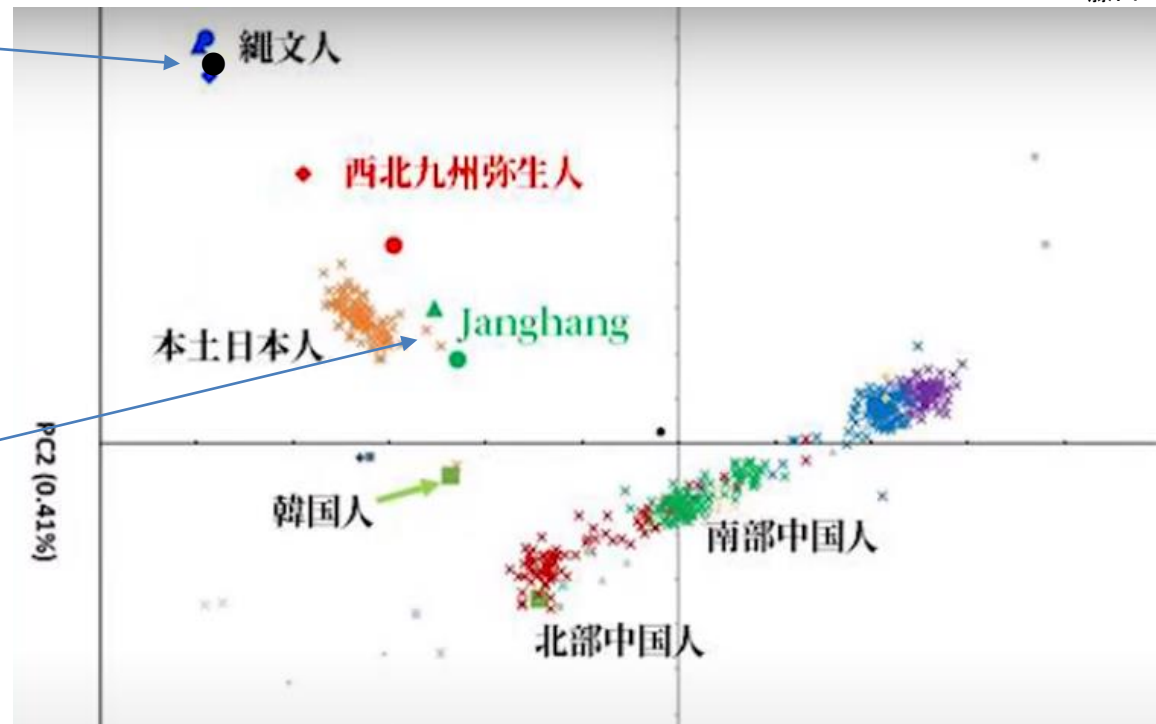
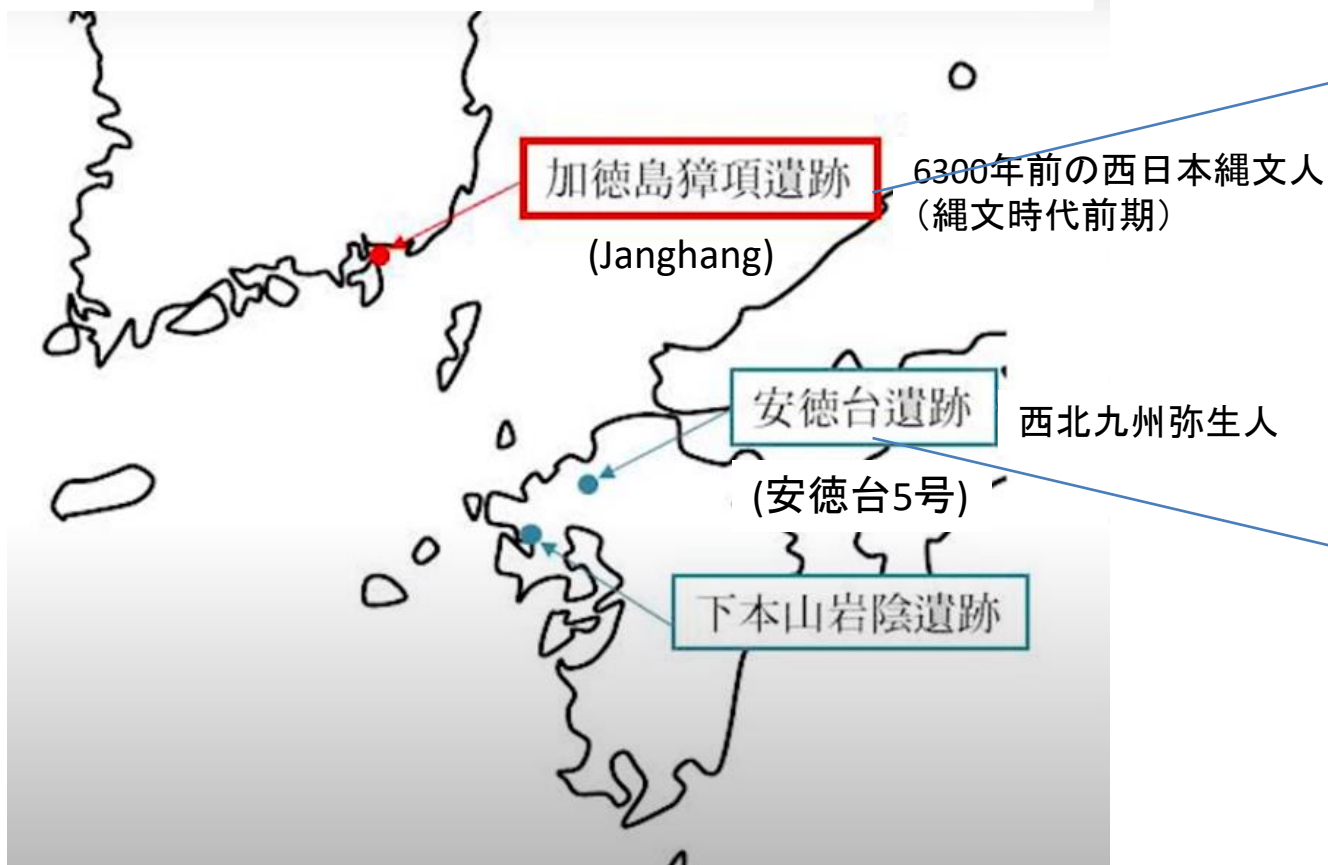
国史跡・青谷上寺地(かみじち)遺跡(鳥取市)で出土した弥生時代の大量の人骨＝2世紀ごろ＝のDNA分析の中間報告会が2日、同市のとりぎん文化会館であった。国立科学博物館の篠田謙一副館長が、まだ途中段階で不確かだと断った上で「(人骨の)父系の遺伝子は縄文系に近いグループ」に多くが位置付けられると説明した。父系の遺伝情報が分かる「核ゲノム」分析の成果。

青谷上寺地遺跡から出土した外傷人骨は、倭国大乱に起因するものでないかと示唆されている。尚、この「核ゲノム」解析の結果は、タイトルとは異なり、この遺跡の弥生人の核ゲノム解析は彼らが縄文系であることを示したものであろう。(藤田)

青谷上寺地人骨のミトコンドリアがD4であったということは(篠田謙一らの解析、NHKサイエンスゼロ)、この集団の母系祖先は華北からきたことを示すもので、旧石器時代、縄文時代、あるいは弥生時代のいずれかの時代に渡来したことを示し、必ずしも2世紀に渡来してきたことを意味するものではない。ちなみに、縄文人にもD4がかなり存在する。このD4は旧石器時代後期に渡来してきたものと思う。このようにミトコンドリア解析ではいつ列島に来たかは分からない。一方、核DNA解析は二つの人集団の混血の状況を解析するもので、二つの集団がどれほど混雑したかを示す。故に、人集団の近縁性を調べるうえでミトコンドリア解析よりも核DNA解析が勝る。上図のように現代日本人の核DNAは、縄文人より韓国人に近いとすることは、韓国の原住民は西日本縄文人であったためであろうか。また、前スライド(斎藤氏ら)の主成分解析と上図および前スライドの解析(篠田氏ら)とは微妙に違う。主成分の取り方の差が原因か。さらに、青谷上寺地での大量殺戮は倭国大乱と関係しているのか。(藤田)

佐賀市の東名遺跡から出土した縄文時代早期人骨(7800前)についての核ゲノムの主成分解析の結果(●)を示す。東名遺跡人は典型的な縄文人域に入る。(篠田ら Anthropological Science 129:13)

南朝鮮の加徳島獐項遺跡の西日本縄文人と安徳台遺跡の西北九州弥生人のゲノム解析をすると両者とも本土日本人に最も近い！！



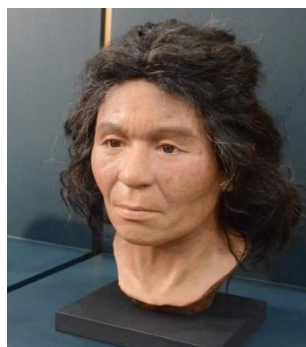
朝鮮半島では縄文時代草創期の1.2万年前から早期の終結時の7千年前まで遺跡が殆どなくなり、新人の気配が絶える。このことは、旧石器時代に南下した古華北人が半島に留まらずに、ほぼ陸橋化した対馬海峡を通過し一気に列島にまで侵入していったためと思われる。縄文時代早期と前期の境に鬼界カルデラ噴火(7,300年前)があり、南九州と四国の西日本縄文人は壊滅した。その災厄から逃れた西日本縄文人(倭人)の一部は北へ向い、当時殆ど無人であった南朝鮮(南韓)に渡り、漁撈文化を興した。このように、朝鮮半島の新石器時代の原住民は西日本縄文人と考えられる。従って、縄文時代前期の南朝鮮の加徳島獐項遺跡には西北九州の安徳台遺跡同様に西日本縄文人が居住していて、南朝鮮と西北九州は、経済的・文化的・ゲノムのに一体化していた。この一体化は、華北人と朝鮮人(高句麗系)南下により南朝鮮の倭人が圧迫され一部は西北九州に帰来し弱体化するが、6世紀に倭国の勢力域であった任那が新羅に滅ばされるまではなんとか維持された。このように、加徳島獐項遺跡の西日本縄文人と同じく安徳台遺跡の西北九州弥生人もまた西日本縄文人の後と考えられ、ゲノム解析すると両者とも本土日本人に最も近いという右の結果を整合性をもたせて説明することが出来る。

(藤田泰太郎)

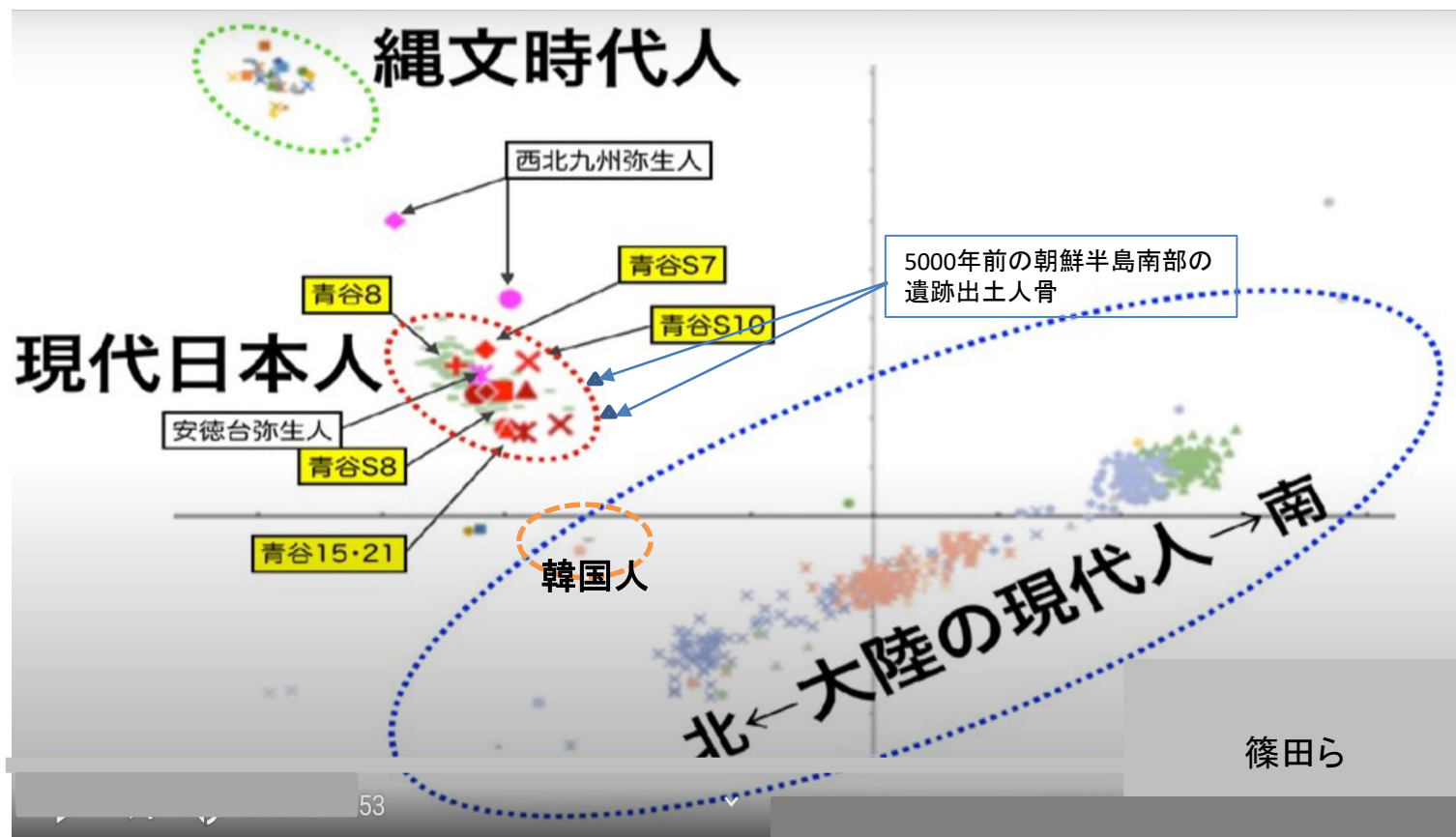
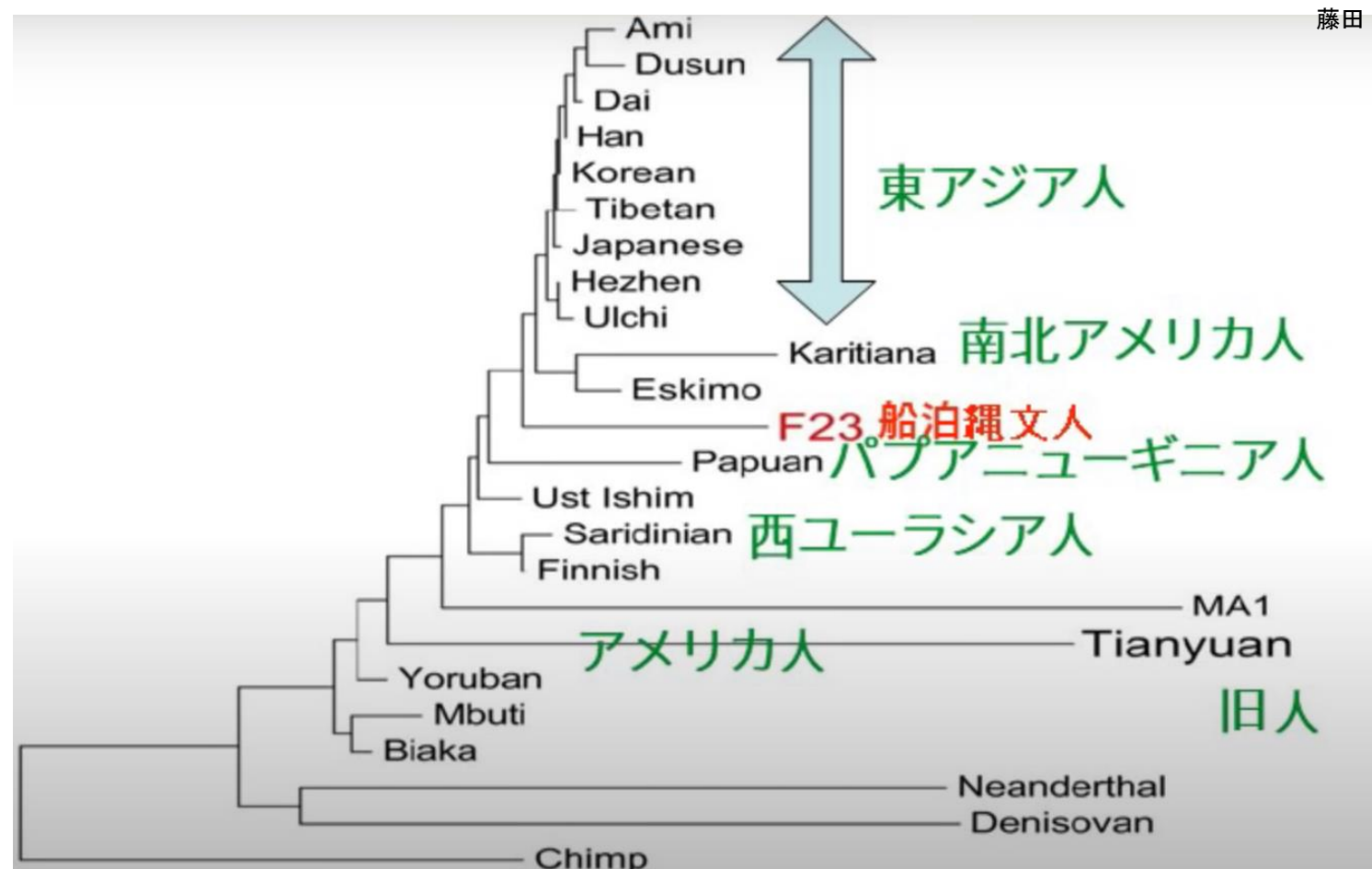
ゲノムからみる弥生時代人
 渡来系弥生人は日本人の祖先か
 ゲノム分析と歴史解釈 神澤秀明 国立科学博物館
 (2)ゲノムからみる弥生人 | 神澤秀明(国立科学館)—YouTube

北九州(安徳台、福岡)と山陰(青谷上寺地、鳥取)の弥生人のゲノムは、現在日本人のゲノムと識別できない。

右上の分岐図によると、F23 船泊縄文人はパプアニューギニアより後で、かつエスキモーより先に分岐している。また、右下図(主成分解析)に示すように、倭国大乱の初期(弥生時代後期)に殺戮されたと思われる青谷上寺地遺跡出土の弥生人骨のゲノム解析は、5体(青谷8, 青谷S7, S8, S10, 青谷15・21)とも現在日本人ゲノムの分布範囲にあることを示した。さらに、注目すべきことに、5000年前の朝鮮半島南部の遺跡人骨もまた現在日本人ゲノムの分布範囲にあることが判明した。(藤田)



船泊遺跡(礼文島)船泊23号人骨の復元像
人骨の骨格にゲノムデータから得られた軟部組織に関する情報を加味して復元された像(国立科学博物館)(新版 日本人になった祖先たち、篠田謙一)



遺伝子解析から見た東アジアの民族関係 | 斎藤成也 教授(国立遺伝学研究所 集団遺伝研究室)Youtubeより

日本人ゲノムの多重構造モデル

埴原和郎は、1980年代に日本人集団の2重構造モデルを提唱した。このモデルの要点は次のとおりである。

- (1) 現代日本人の祖先集団は東南アジア系のいわゆる原モンゴロイドで、旧石器時代から日本列島に住み、縄文人を生じた。
- (2) 弥生時代から8世紀ころにかけて北アジア系の集団が日本列島に渡来し、大陸の高度な文化をもたらすと同時に、在来の東南アジア系（縄文系）集団に強い遺伝的ならびに文化的影響を与えた。
- (3) 東南・北アジア系の2集団は日本列島内で徐々に混血したが、その過程は現在も進行中で、日本人は今もheterogeneity、つまり2重構造を保っている。

Ancient genomics reveals tripartite origins of Japanese populations 2021 *Sci. Adv.*

古代人ゲノム解析から、日本人集団が3種類のゲノム起源を持つ、つまり3重構造をもっていた。

本研究では東大・太田さん、国立博物館・篠田さんが解読した縄文や弥生人のゲノムに加えて、新たに縄文人9人、そして解読が進んでいなかった約1300年前の古墳時代人3人のゲノムを解析し、以下の結果を得た。

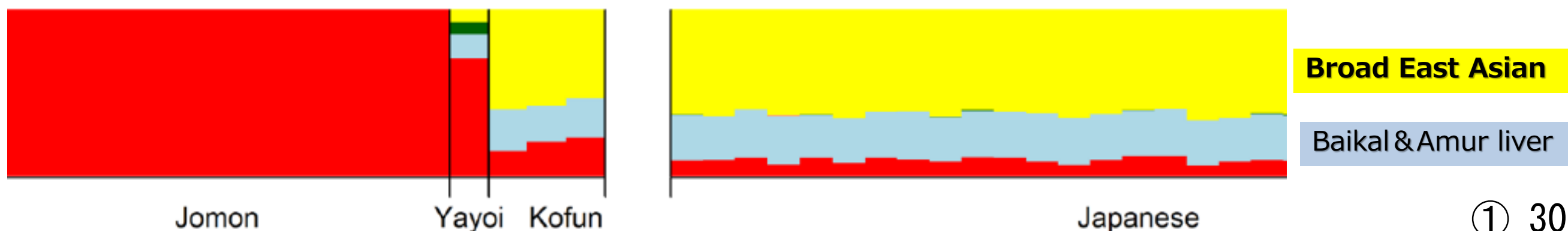
- 9体の縄文人ゲノムが加わった結果、東ユーラシアに分布していた人類が日本に渡来し、その後大陸との交流なしに独自のゲノムを進化させたのが縄文人である。
- 他の民族から隔離された縄文人は、急速な人口減少を経験し、約1000人ぐらいの規模で生活していたことが、ゲノムの同一配列長解析から示唆された。
- 弥生時代のゲノム解析は3人で、少ないという問題があるが、従来考えられていた東中国より、農耕が発達していなかった北東中国のゲノムに近い。縄文人のゲノムの比率が高いことから、渡来した人たちが徐々に同化していったことを示している。
- 今回新たに加わった古墳時代人ゲノムから、古墳時代人のゲノムは現代日本人ゲノムとほぼ等しく、縄文人ゲノムと北東アジアが混合した弥生人ゲノムを3割強持っている。残りはそれまでの日本人に存在しなかった黄河流域の青銅器時代から鉄器時代のゲノムである。弥生から古墳時代の間には大きなギャップがあり、これまでとは異なる大陸人との交雑が急速に進んだ。
- 発表された弥生人のゲノム解読カバー率が極端に低いことが問題で、今後、弥生・古墳時代人の解読を進めることの重要性を示している
- Imp: 弥生時代と古墳時代の間どこかに、大陸人による日本征服がおこったと考えても良いほど、弥生と古墳時代のギャップは大きい__客観的科学分析が示唆する“事実”

? 宮内庁が古墳の科学的調査を頑なに拒むのは、死者に対する礼節を守るためだけなのか？

(中野洋文 解説)

上記の3重構造説は、私が公表している、「古の日本(倭)の歴史」(最新版) <https://www.yasutarofujita.com/>、「日本人の成り立ち」YouTube (<https://youtu.be/2Ae8c5XKfLE/>)、「日本語の起源」、Facebook投稿(3/9)とは相容れない。さらに、縄文人の子孫しか保有しないATLウィルスを日本人のみが有しているという事実とも馴染まない。私は、あくまで日本人は縄文人ゲノムをベースにしていると思う。古墳時代に総計2万人という秦氏(純粋な漢民族ではない)の渡来があったが、当時の日本の人口は百万人を超えており、とてもゲノム構造の大きな変動を引き起こすような交雑が起きたとは思えない。(藤田)

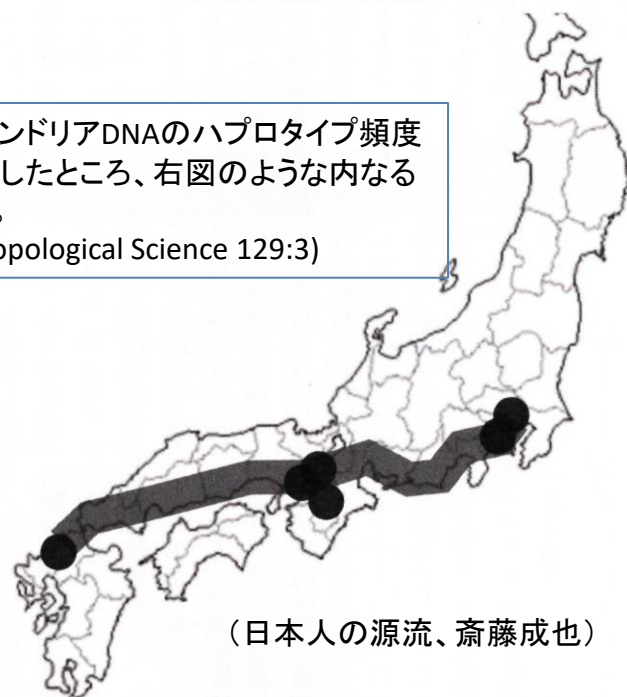
Ancient and present-day Japanese



日本列島中央部の中央軸の存在、日本人の「内なる二重構造」

日本列島中央部の中央軸と周辺部分

47都道府県のミトコンドリアDNAのハプロタイプ頻度データを主成分分析したところ、右図のような内なる2重構造がみられた。
(斎藤成也ら、Anthropological Science 129:3)



(日本人の源流、斎藤成也)

日本人の源流(斎藤成也)に記載の上図は日本列島中央部の中央軸と周辺部分を示す。九州北部から関東に至る中央軸の西部(大和まで)は、邪馬台国終焉までの南朝鮮からの渡来人(倭人の帰来人が主)侵入と考えられる。これは、崇神東征までの東征(三島大明神、倭宿禰、ニギハヤヒおよび崇神)に当たると考える。崇神東征後の崇神王朝の時、ヤマト王権の東日本進出が始まり、応神東征後の応神王朝になるとヤマト王権の倭国支配が完成した。これに伴い中央軸が関東地方にまで伸びた。古墳時代から飛鳥時代までの南朝鮮からの渡来人は、倭人の帰来人、倭人と華北人、江南人や高句麗人との混血人さらに少数の華北人、江南人と高句麗人と考えられる。

斎藤成也は、日本人(主として出雲人と東北人)の核ゲノム解析から、日本列島中央部の中央軸の存在、「内なる二重構造」を提唱している。
(藤田)

日本人ゲノムの多重構造再考

縄文人の祖先は、3万年前ごろ、出アフリカした新人のうちオーストラリアに至る南ルートをとった集団の一部が東南アジアから大陸海岸沿いに北に向かい日本に達していると思われる(古華南人)。さらに、北ルートをとった集団が中国西部に現れるのが4万年前頃で朝鮮半島経由で列島に断続的に到達するのが2万年前頃から1.3万年前である(古華北人)。さらに、華北から北上してバイカル湖に達し、氷河期の寒冷気候のため南下し始め列島に達したのは1.3万年前と言われている(古バイカル湖人)。このように、3方向からの新人集団が列島で混じり合いその後の一万年の縄文時代の間には縄文人のゲノムが成立したものと思う。ただ、一万年の縄文時代を通じて、日本や南朝鮮と同じ照葉樹林帯の江南や東南アジアからの少数ながらコンスタントな列島への渡来があったものと思われる。彼らは列島に粗放畑作の熱帯ジャポニカや神道体系の基盤を持ち込んだ。かくて、弥生時代早期・前期に江南から南朝鮮経由あるいは直接に温帯ジャポニカの水田稲作が持ち込まれる前に、上代日本語の祖語となる古日本語が、完成し尽くされた言語といわれる、サンスクリット語の成立時期、3000年前には、古日本語が混合言語として既に成立していたと考える。このような縄文時代・弥生時代の江南あるいは東南アジアから小集団ながら持続的な渡来が、日本人集団のゲノム構造(西日本にはO型のY染色体が多い)を作ったものと考えられる。さらに、弥生時代早期に南朝鮮に逃避した江南人、南朝鮮に南下してきた華北人や朝鮮人(ツングース系)に圧迫された縄文人の列島への帰来に伴うこれら大陸系集団の渡来(弥生時代中期後半・後期・古墳時代)と任那滅亡に伴うかなりの数の大陸系集団の渡来、さらに飛鳥時代以降の長年に亘る大陸系集団の渡来(特に秀吉の朝鮮出兵に伴うかなりの数の朝鮮人の日本への連行)(これら主に瀬戸内海航路を中心にした大陸系集団の渡来)および彼らの東海や南関東への進出が、日本人ゲノムの内なる2重構造を形成したものと考えられる。

埴原氏が提唱した、縄文人と渡来系弥生人からなる、日本人の2重構造モデルが定説化している。また、前スライドで示すように、最近日本人の3重構造モデルが提唱された。このモデルでは、古墳時代に東アジアから大規模な渡来があり、現在日本人の形成に至ったと云う説である。実際、古墳時代に数万に上る、弓月の民(秦氏の祖先)の渡来や新羅の王族のアメノヒボコの集団の侵入があった。しかし、当時の倭国は100万程度の人口を有しており、数万人程度のアメノヒボコや秦氏の渡来が日本人のゲノムの大規模な変動を起こしたとは考え難い。(藤田)

滋賀県が最も渡来人が多い！

渡来人は四国に多かった？ ゲノムが明かす日本人ルーツ

日経サイエンス8月号2021/6/24

私たち日本人は、縄文人の子孫が大陸から来た渡来人と混血することで生まれた。現代人のゲノム（全遺伝情報）を解析したところ、47都道府県で縄文人由来と渡来人由来のゲノム比率が異なることがわかった。弥生時代に起こった混血の痕跡は今も残っているようだ。

東京大学の橋本順教授らは、ヤフーが2020年まで実施していた遺伝子検査サービスに集まったデータのうち、許諾の得られたものを解析した。1都道府県あたり50人のデータを解析したところ、**沖縄県で縄文人由来のゲノム成分比率が非常に高く、逆に渡来人由来のゲノム成分が最も高かったのは滋賀県だった。**沖縄県の次に縄文人由来のゲノム成分が高かったのは九州や東北だ。一方、渡来人由来のゲノム成分が高かったのは近畿と北陸、四国だった。特に四国は島全体で渡来人由来の比率が高い。なお、北海道は今回のデータにアイヌの人々が含まれておらず、関東の各県と近い比率だった。Journal of Human Genetics, DOI:10.1038/s10038-020-00847-0

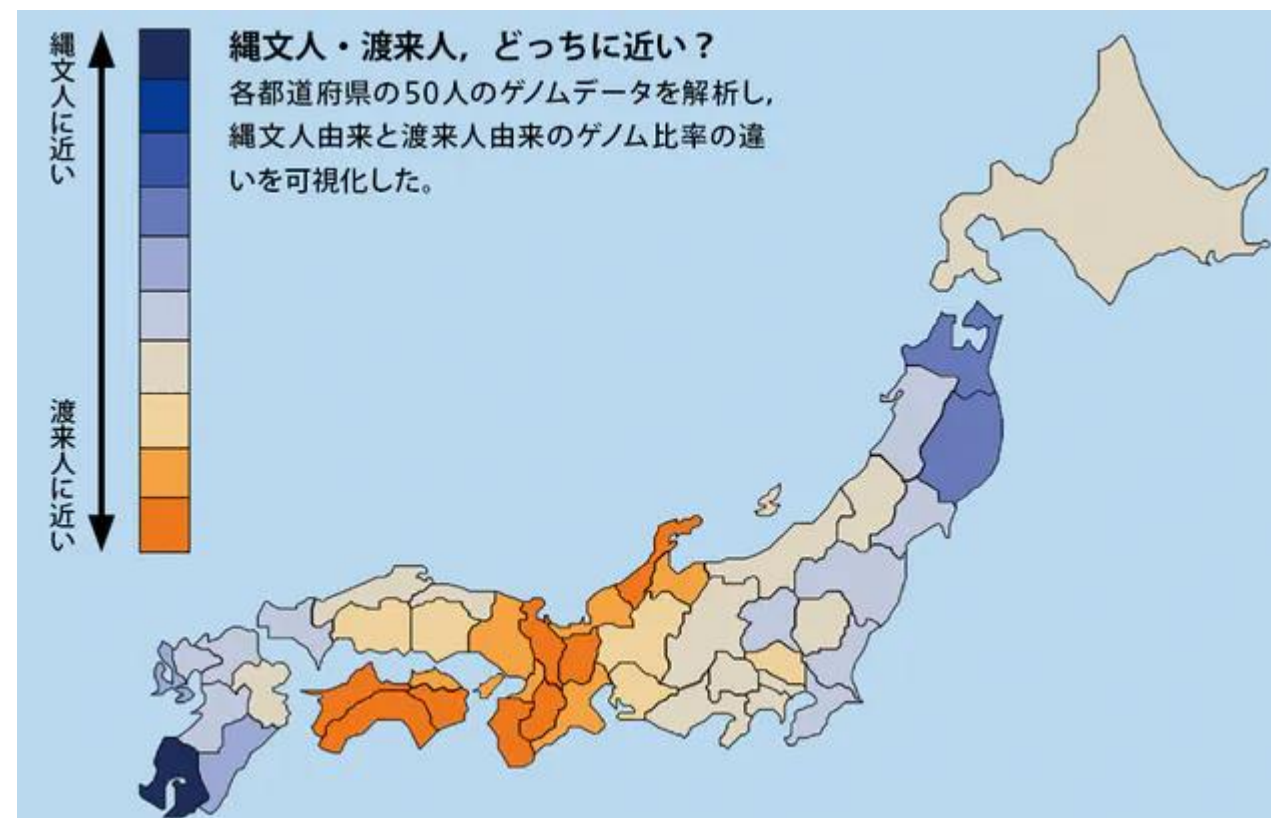
以上の結果は、渡来人が朝鮮半島経由で九州北部に上陸したとする一般的な考え方とは一見食い違うように思える。上陸地点である九州北部よりも、列島中央部の近畿などの方が渡来人由来の成分が高いからだ。橋本教授は「九州北部では上陸後も渡来人の人口があまり増えず、むしろ四国や近畿などの地域で人口が拡大したのではないか」と話す。

近年の遺伝学や考古学の成果から、縄文人の子孫と渡来人の混血は数百～1000年ほどかけてゆっくりと進んだとみられている。弥生時代を通じて縄文人と渡来人が長い期間共存していたことが愛知県の遺跡の調査などで判明している。どのような過程で混血が進んだのかはまだ不明で、弥生時代の謎は深まる一方だ。今回の解析で見えた現代の日本列島に残る都道府県ごとの違いは、弥生時代の混血の過程で起こったまだ誰も知らない出来事を反映している可能性がある。書物にも残されていない日本人の歴史の序章は、ほかならぬ私たち自身のゲノムに刻まれているのだ。

（日経サイエンス編集部 出村政彬）

沿海州からの渡来の規模は如何ほどか

先述のように、隠岐などで産出の黒曜石が日本海を横断あるいは沿岸沿いにロシアの沿海州に運ばれていた。縄文時代にもナラ林文化圏の栽培作物が沿海州からリマン海流に乗り対馬海流を横切り若狭や越前などの日本海側に到達する、人的・文化的交流があった。また、興隆窪・紅山文化もまたこのルートで伝わった可能性が高い。弥生時代中期に匈奴の製鉄技術（野ダタラ）や中国北方の「オールドス式短剣」（双環柄頭短剣）もまた日本海横断して渡来したと思われる。さらに、奈良・平安時代には朝鮮半島北方や沿海州に版図を持つ渤海からの使節団が日本海を横断して度々来日している。このように、朝鮮半島を経由しない日本海を横断する海路が存在したことは明らかである。実際、どれほどの渡来人が沿海州から列島に渡っているかは不明であるが、滋賀県や北陸地方に渡来人が多いという事実と関連している可能性がある。（藤田）



各都道府県の50人のゲノム情報をもとに、その違いを可視化した。縄文人由来のゲノム成分が多い県は青色で、渡来人由来のゲノム成分が多い府県はオレンジ色で表示されている。縄文人由来のゲノム比率が他県と比べて極めて高い沖縄県は地図に含んでいない

縄文人は、東日本縄文人と西日本縄文人とに大別される。西日本縄文人は東アジアから半島南部のほぼ陸橋化した地帯を経由して渡来して来た。一方東日本縄文人は北方から樺太経由で渡来してきた。縄文時代後期に東日本縄文人と西日本縄文人はある程度混血して均一化したと云われている。しかしながら、現在のところゲノム解析された縄文人は東日本縄文人3個体だけで、彼らのゲノム成分が縄文人のゲノム成分とされている。従って、西日本縄文人の中にある東アジア由来のゲノム成分は考慮されていない。

縄文時代後期には、地球気候寒冷化に伴い半島北部あるいは沿海州から直接日本海を横断する渡来が多くなる。弥生時代になると江南からの渡来が多くなり、弥生時代後期になると半島南部からの倭人の帰来が増加する。古墳時代以降は華北人や高句麗人（朝鮮人）の渡来が多くなる。従って、上図の各都道府県人のゲノム情報をもとに明らかになった、縄文人と渡来人由来のゲノム成分の割合の変動は、弥生時代の渡来人のゲノム成分を反映しているのではなく、旧石器時代から現在までの各都道府県人形成の総和と考えるべきである。なかでも、小生の生まれ育った**滋賀県が最も渡来人のゲノム成分が多い**というのは若干の驚きだが、近江の歴史を鑑みるとさもありなんと思う。

（追記）南朝鮮と西北九州は倭人（西日本縄文人）の勢力圏として一体化していた。弥生時代の朝鮮半島からの渡来者は倭人が帰来したものが大部分である。一方、古墳時代から飛鳥時代にかけての渡来者の多くは、華北人や高句麗人である。彼らが橋本の云う渡来人に当たると思われ、古墳時代中期の秦氏や飛鳥時代の百済や高句麗の滅亡に伴う遺民であり、彼らの少なからずのものは日本海を横断して直接北近畿（近江を核）に渡来、さらに四国へと移動したと思われる。

藤田泰太郎

古代中国の新人 モンゴロイドとコーカソイドの凄惨な戦い

進化論の本質—弱者が適応種—が、人類史にも見られたという興味深い記事。黄河文明の遺跡から、コーカソイドのDNAが見つかったという。外見は似たようでも、中国人と日本人の気質が異なる点も妙に納得です。さらに似たような話で、古代の漢民族と、現代の漢民族が人種が違うという、おもしろい話があります。

黄河文明の遺跡から出土する人骨のDNAを調べてみると、それらはモンゴロイドではなく、なんとコーカソイド、つまり白人種だったというのです。これは東大の植田信太郎、国立遺伝学研究所の斎藤成也、中国科学院遺伝研究所の王瀝(WANG Li)らによる古代中国の人骨のDNA分析研究の成果です。

研究の対象となったのは、

- 1 約2500年前の春秋時代の人骨
- 2 約2000年前の漢代の臨淄(シ) (中国山東省、黄河下流にある春秋戦国時代の齊の都) 遺跡から出土した人骨
- 3 現代の首都は臨淄住民

これらの人骨から得たミトコンドリアDNAの比較研究の結果によると、三つの時代の臨淄人類集団は、まったく異なる遺伝的構成を持っていました。どういうことかということ、中国にはもともと揚子江のほとりに、稲作を行うモンゴロイドが住んでいたのですが、ある日、黄河の流域に、大型の動物を追ってやってきたコーカソイド(白人種)が住み着くわけです。白人種たちは、大型動物を捕って食べますから、大型の武器を持っています。住まいは竪穴式住居です。

モンゴロイドたちは、農耕文化ですから、武器ではなく、クワやスキを手にしていて、武器を持ちません。住まいは、食料保管のために高床式住居です。その武器を持たないモンゴロイドのところ、ある日、武器を持った白人たちが現れる。法のない時代に、武器を持った者たちは、武器を持たない者たちの前では、まさに超人です。モンゴロイドたちは襲われ、食べ物を奪われ、女性たちは強姦されたことでしょう。そんなことをされたら、モンゴロイドたちだって黙っていません。復讐のために武器を手にして、コーカソイドたちに戦いを挑みます。互いに殺され奪われた恨みがきっかけの戦いです。戦いは凄惨をきわめたことでしょう。

こうして春秋戦国時代が始まります。双方の種は、互いに大軍を率いるようになり、凄惨な殺し合いと強姦が起こる。結果として、白人種とモンゴロイドの血が混じり、彼らの外観は、数の上で圧倒的多数であるモンゴロイドに近いものとなりました。

(弱者が生き残った史実～共生という文化を持ったモンゴロイド、るいネット)

4,000年前ごろから世界的な気候の冷涼化に見舞われ、縄文晩期に入る3,000年前ごろには厳しい寒冷化・乾燥化に見舞われた。この寒冷化に伴い北方の畑作・牧畜民は南下を始め、稲作・漁撈民を圧迫し始めた。また、中東や中央アジアのコーカソイド(トルコ系、ユダヤ系など)は東に向かい西域から東アジアに侵入し始めた。これらの畑作牧畜民族の中で最大の勢力を誇ったのが秦である。秦ははじめ西域の小国であったが、春秋時代から強国となり鉄器を携え華北や江南の民を圧倒し始めた。秦は戦国時代を勝ち抜き、中国を統一するにいたった。しかし、秦が滅ぶと漢民族(既に中東や中央アジアのコーカソイドとの混血が進んでいたと思う)が中国を統一した。

①約2500年前の春秋時代の人骨、②約2000年前の漢代の臨淄(シ) 遺跡から出土した人骨、③現代の臨淄住民の3者が全く異なるミトコンドリアDNAを持っていたことは特に驚きではない。(藤田)

独マックス・プランク進化人類学研究所のジャンジャック・ユブラン氏は、「人類(新人)がチベット高原に到達したのは約4万年前とみられるとされていた。そして、35万年前から5万年前の中国および東アジアの(ヒト族の)化石は、ほぼ全てデニソワ人のものではないかという仮説」を主張している。(藤田)